国語表現学

国語文章論

波多野完治

國語科學講座

— IX —

國語表現學

國語文章論

波多野完治

株式會社
明治書院

國語科學講座

— Ⅸ —

國語表現學

國語文章論

波多野完治

株式會社
明治書院

目次

國語文章論

波多野完治

はしがき

本講座のうちで、「國語文章論」と關聯し、書き方によつては叙述が重複すると思はれるものは次の四項目である。

一　言語美學　　二　日本文章史　　三　國語法（六項目）　　四　國語形態論

これらの諸項目との重複を出來るだけ避けるために、私は自分の項目に對して、次の樣な注意をもつて臨む事にした。

一「言語美學」との關係。私の項目は「國語法」「國語形態論」等との關係から、結局文章の美しさを對照とする事になり、この點で「言語美學」の叙述と多くの部分で重複する可能性を生ずる。これを私は、

（イ）本項目を書かれた文章に限定すること。

（ロ）心理學的側面から文章を考察すること。

以上の二點によつて避けようと考へる。第一の注意によつて「文章」を出來るだけ形式的に採り、「話された言葉」に

ついての一切を省く。又「書かれた文章」の「表現性の機構」を「話された言葉」から導出する事はバイイ等ソシュール學者の得意の題目であるが、私はこれらを全て「言語美學」の筆者の明快な叙述に期待する事にする。

第二の注意によつて本項目を「心理學から見た文章」論とし、或は「心理學的言語美學」又は「修辭學の心理學的說明」とする。文章の美學をそれ自體としての觀照性からでなく、その心理學的機構に於いて見ることが、私のこの項目に對する目的でもあり、抱負でもある。

二「日本文章史」との關係。日本文章史との關聯においては私の項目を、(1)歷史的叙述でなく、專ら體系的叙述とする事によつて、(2)歷史的文章の研究よりもむしろ現代の文章を主體とする事によつて、その重複を省く。特に歷史的修辭法を取りあつかふ場合にも、その心理學的側面が重視されるから、これによつて修辭の社會的文化的側面を重視する文章史との重複を避ける事が出來よう。

三「國語法」（六項目）及「國語形態論」との關係。國語法の諸項目は國語の文法的諸形態を、また「國語形態論」の項目は國語の文法的形態の心理學的哲學的解明を志す事であらう。これに對して「國語文章論」の項目は、國語の審美性或は印象性の問題の心理學的解明を取りあつかふ事になる。言語の審美性或は印象性の問題を言語の文法性或は言語の正しさの問題から果して完全に切り離す事が出來るかどうかは疑問であるが、講座の樣な共同勞作にはこの程度の形式的區別はやむを得ないとしなければならない。尙、正しい國語と良い國語との關係（卽ち言語の文法性と修辭性の問題）は本項目の序論において簡單に取りあつかふ事が出來るつもりである。

以上を要約すると、私の項目の課題は「文章の修辭機構の心理學的解明」を目的とする事になる。次にこれについて

今少し立ちいつた説明に入らう。

前篇　總　　論

一　國語文章論の課題

私の項目「國語文章論」は、「文章の修辭手法の心理學的解明」として規定された。次に進んでこの規定に含まれる文章・修辭・心理學の三つの概念を更に詳しく分析して見よう。

一　文章　ここに言ふ文章が書かれた文章を意味するのである事は既に述べた通りである。從つてこの場合の文章は普通の文學論で言はれる style, Stil に著しく近づいて來る。

最近の文學論及文學史では style の意味が著しく擴張された樣に見える。從來の文學論ではスタイルと言へばいつも文章の形式的方面を指して居た。作家及作品の内容は措いて、觀點が主として文章の調子に向けられた場合がスタイルなのであつた。最近唱へられる樣式史（Stilgeschichte）においてはさうではなくて、作品全體の樣式が問題になつて來る樣である。造形美術の樣式史が、作品全體の上ににじみ出る樣式構造を取りあつかふ樣に、造形美術の影響を受けて成立した文學上の樣式史もやはり作品全體の樣式を取りあつかはうとする樣である。これは言ふまでもなく正しい態度に相違ない。文學の内容と形式とを區別する事が出來ない以上に、文學の文章と文章の表す意味とを區別する事はむづかしい。むづかしいよりもむしろ不合理である。從つてこれを出來るだけ統一的な觀點の下に取り扱ふ

事が正しいのは言ふまでもない。

然し私の項目は文學論なのではなく、國語科學中の文章論なのであるから、ここでは特別な形式化を敢へてして、特に文章だけを抽き出して取りあつかふ事にする。從つてここでは最近の樣式史に見られる正しい觀點が充分に反映されない譯である。この點は豫め讀者の了承を乞ひたい。

樣式史のもう一つの特徴は文學樣式を個性的に見ずに、これを類型的に見、或はこれを社會的文化的背景において見る事である。特に文章について言へば、從來スタイルと言へば誰のスタイル、彼のスタイルが問題とされ、ある時代のスタイル、ある運動、ある一派のスタイルがあまり問題とならなかつた。特にそのスタイルの特徴を歷史的文化的背景から說明しようなどとする事は思ひもよらない所であつた。新しい文學樣式史は舊來のこの傾向に反對して、類型學的態度及文化史的態度の導入に努力して居る。又 Stylistique, Stilistik (小林英夫氏は文體論なる譯語を宛て居られるが、又これを文章樣式學と呼んでもよいと思ふ)の名のもとに最近とみに盛になつた言語學上の諸研究も、ある時代、ある傾向、ある階級の言語をやはり文化史的社會學的觀點の下に理解しようとして居る。*

* Deutschbein, Neuenglische Stilistik, 1932.

この立場も文章研究においては極めて重要であると信ずる。從來の形式的文章研究から進んで、新しい展望がひらかれるためには、この見地に立つてのみ始めて可能であらう。然し私の項目においてはこの見地も充分に消化しきれない事を遺憾をする。なぜならば私の項目は、はしがきにおいてのべた樣に、文章技法の體系的解明であつて、歷史的敍述を二の次にしなければならないから。然しこの項目に餘白を得たならば現在私の考慮しつつある文章樣式史の

大體を述べたいと思ふ。

二　修辭　修辭學者も文體學者も文章のうちに「正しい文章」と「良い文章」とを區別する。文法的に誤りのない文章が正しい文章で、修辭技法にかなつて居るのが良い文章だと言ふのである。世の中にこれ程奇妙な區別はない。修辭學者が技術としての修辭學の見地から、この二つを區別するのはまだ解し得られるとしても、文體學者がこの二つを區別するのはきはめて奇妙であると言はなければならない。

なぜなら、我々が自己の思想を表現してこれを他人に傳達するのに、「正しい表現」以外に、どうして「良い表現」が考へられるのであらう。有名なペイターの言葉を引合ひに出すまでもなく、我々の思想は唯一つであるから、その正しい表現も唯一つであるに相違ない。我々の思想が我々の思ひ通りに表現された以外に「良い表現」とは何を意味するのであるか。

かかる混亂を說明するにはこれを二つに分つ事が便宜であらう。

修辭學者は自己の思想とその表現とを區別する。特にソフィスト的な傾向を有する學者においては、この二つははつきりと區別されて居るのであらう。自分の言ひたい事（自己の思想）はどんな事でもいい。それを他人に効果ある様に表現する事が修辭學の技術である。自分の考へて居るのと全く反對の思想をでも、他人に眞らしく、感激させる様に話せるならばそれで修辭學の任務は終る。かかる考へにもとづいて、自分の思想がそのままの形で表現された場合（正しい文章）と、それが効果ある様に表現された場合（良い文章）とを區別したのである。

文體學者の區別はこれとは異つた見地に基いて居る。彼等は社會及個人の思想と感情とを區別する。思想だけが表

明された場合が正しい文章で、それが感情を伴つて表明された場合が良い文章である。正しい文章とは文法的に誤りがなく、且つ論理的に誤りがない事を意味し、良い文章とはそれ以上に感情が付加されて居る事を意味する。修辭書に記載されて居る修辭技法と言はず、言語表現の機構に表現的に適應したものが良い文章である。

然し修辭法の區別にせよ、文體學上の區別にせよ、問題は全く表現の場面にかかつて居る。もし父が死んで悲しいといふ氣持を他の人につたへ樣として、その意味(卽ち思想)だけをしかつたへ得なかつたとすれば、それは「良い文章」でないばかりでなく「正しい文章」でさへないであらう。又幾何學の命題が美辭麗句をもつてかざられてあつたならば、これも「正しい文章」たる資格がないと言はなければならない。

從つて客觀的に見て良い文章と正しい文章とを區別する事は誤りであつて、その文章の使用される場面と、使用の方向(ヴェクトル)とが問題なのである。客觀的には文法的形式以外に何の要素も含んで居なくても、それがある場面に使用されれば、きはめて表現的な効果を生む(「痛い」「俺は馬鹿だ」「御臨終です」)事があらう。人が死んだ場合、いかに美辭麗句を使用したとて、それによつて、その場面にふさはしい感情の表現が出來るとは限らない。

又反對に、純粹に記述的な文章においては出來るだけ客觀的な正確な言葉づかひをしなければならないから、却つて表現的なあやを抑壓してしまう事がある。科學的な文章においては特にさうである。從つて客觀的に見て正しい文章とか、良い文章とか言ふものはないのであつて、場面々々の表現的價値に應じて、文章の評價を行はなければならない事が明かである。

修辭學者が正しい文章と良い文章とを區別したのは文章練習の段階を示したものであつて、文章の種類を示したも

のではない。修辭學者は始め意味のよく通る文章を、わかる文章を、きづのない文章を習練させ、次に種々の表現手段を教へて、美しい文章をかく様に導くのを常として居る。然しこの際注意しなければならないのは、修辭學者といへども、客觀的に達意の文章を書かせたり、美しい文章をかかせたりするのでない事である。彼等は始め學習者に題を出すのに、出來るだけ達意の文章で用が足りる場面、否それ以上に達意以外の要素が不用な場面をえらんで題を出す。達意といふ事が最高の目的であつて、それ以上の要求を起す必要のない場面をえらんでやる。さうして段々と表現的な場面へ這入る様にしてゐるのである。――もし修辭學者が、かような心づかいをしないで始めは客觀的に達意の文章を、次には客觀的に美しい文章をかかせようとするならそれは根本的に誤つた考へである。小學校及中學校の作文指導などでは、かかる誤謬がよく見受けられる。これは言語が場面に制約せられて居るものである事、從つて、正しい文章とか美しい文章とか言ふのは本質的な區別でなく、目的に應じた區別で、本來は一つのものである事を忘れて居るからであると思ふ。

しかし修辭學者のかかる區別はまだ解し得られるにしても、文法學者或は文體學者のこの區別はきはめて解しにくい。なぜなら、文體學者は修辭學者の様に文章修練の段階を顧慮する必要などはないのであるから。

文體學的に言つて、正しい文章と良い文章との區別はきはめてあいまいであつて、區別の出來ない事が多い。原理的に區別出來ないものを區別しようとするのであるから、混亂を生ずるのは當然である。我々の文章には正しい文章（文法的にも論理的にも正常な文章）でありながら、我々が決して認容する事の出來ない文章がある（外國人の話や文章を見よ、彼等の文章がいかに文法上からも、論理上からも正しく、しかも我々にアプショイを感じさせる言廻しが、

ある事か）と共に、文法的な法則にも從つて居らず、論理的には何のことかわからずに、しかも美しく讀まれる文章がある（俳句や俳文を想起せよ）。前者は文法的にも論理的にも正しい文章でありながらしかも「正しくない文章」であり、後者は文法的にも論理的にも「正しくない文章」でありながら、しかもきはめて「正しい文章」なのである。この事は文の分析が決して文自體の分析に止まつてはならない事を語つて居る。

これは言ふまでもなく、文章が意味をつたへるだけに止まらず、それとともに必ず何等かの表現性を持たうとする要求のあることから生ずる。日常の會話でも我々は唯意味をつたへる以上に、いつも何程か表現的價値をのぞむ（バイイ）。これが言葉にニュアンスをあたへるもととなり、ひいては正しい文章と美しい文章との區別を不可能にするのである。日常の言葉には表現的でない文章はない。言葉が發せられるときには、これはいつも意味と共に一定度の表現的價値をになつて居る。この二つを分離する事は文法學者或は論理學者の抽象であつて、文體學者は言葉をもつと具體的に、全體的に、言葉の全場面を見る必要がある。

以上の解明は、「修辭技法の解明」を志す我々に何を教へるか。我々は修辭技法を、美しい文章、良い文章を書くための特殊なテクニツクと見ず、或は結局においてこの樣に見るにしても、その技法の發生の地盤においてはさうではなくて、言葉を表現的ならしめようとして人間が採つた自然的態度のあらはれとして見、これらの技法を言葉の發せられる具體的環境において考察する事を要求される。ある修辭技法がいかなる修辭効果を有するかを問題とするとともに（これは文章論の重要な課題である）、かかる技法がいかなる言語場面において成立するものであるかを解明しようと努力する事を要求される。

かかる見方によれば言語の表現性と文法性は一つのものとして考察せられるに相違ないから、従つてこの見方はまた前記國語法の諸項目と重複する危險を生ずる。この重複は言はばやむを得ない重複であり、且つ一面から言へば慶賀すべき重複であるとも言へるのであるが、然し私は問題を言語の方から、即ち原因の方から取りあつかつて行かずに、出來るだけこれを修辭技法の方から、即ち言語場面において生じた結果から取りあつかひ、この結果を出發點として、この條件發生を推定する、といふ方向を取る事によつて、この重複を避けようと思ふ。

三　心理學　我々はいよいよ文章論の規定における最後の概念に到達した。修辭技法の心理學的解明といふ場合、我々はいかなる心理學說を指すのであらうか。

從來のレトリックは聯想心理學との結びつきが密接であつた。心理學者でレトリックの問題を最も包抱的な仕方で取りあつかつた學者は言ふまでもなく、アレクサンダー・ベインであるが、彼が聯想心理學の中樞的人物であつた事は言ふまでもない。彼の修辭心理學二卷*は英國人流の極めて面白い觀察を聯想心理學的原理の忠實な適用によつて粉飾したもので、この點に多くの偏見が見出される。またスペンサーの「文體の哲學」**は修辭學中の古典的著作と呼ばれて居る程のすぐれた考案であるが、スペンサーを正統派の聯想心理學者のうちに數へる事は不可能であるとしても、少くとも彼を聯想心理學派の一人と言ふ事は許されるに相違ない。更にフランスの心理學者リボーの著「情的論理」***は、アリストテレース流の古典的意義では明に修辭學の著作と言ふことが出來よう。なぜなら、アリストテレースは修辭學の課題を「說得の技術」として規定したのであり、リボーのこの著はあたかもかかる意味での「說得」の心理を解明しようと志して居るのであるから。さてリボーのこの著書はその基本的精神において明に聯想心理學的である。彼は思

考(從つて情的思考をも)を一義的に聯想の基礎の上に考へる事が出來ると信じて居る。彼が聯想の基礎を感情の上に(即ち Association à base affectiveに)置かうと努力して居る事は決してこの事態の本質を變へるものではない。

* Bain, English composition and rhetoric, 1892.

** Spencer, The Philosophy of Style, 1852.

*** Ribot, La logique des Setiments, 1905.

さて、これらの著書の外に、特に修辭學の心理學的研究と稱すべきものは見出されないのである。かやうに修辭心理學の全著作が聯想心理學である上に修辭學者も、修辭技法の心理學的説明をする場合には全てこれらの心理學者の下風に立ち、自ら獨特の説明を考案する所がなかつた。最近にいたつてハーバート・リードがこの風をやぶつて、きはめて獨創的な修辭技法の解明を志したが、これはむしろ異色の事に屬する。*

* H.Read, The English prose Style, 1928.

この傾向は我國においても同樣であつた。修辭學書としての價値はしばらくおき、修辭技法の心理學的解明を志して居るものは、我國においては、

坪内　雄藏「美辭論稿」(一八九三)　島村瀧太郎「新美辭學」(一九〇二)　夏目金之助「文學論」(一九〇六)
「文學形式論」(一九〇三)　五十嵐　力「新文章講話」(一九〇九)

の五種であると信ずる。この他、日本の修辭學史上で劃期的な歷史的意義を有するものとしては、高田早苗・三上參次共著「美辭學」(一八九〇)、佐々政一著「修辭法講話」(一九一七)及、杉谷代水著「文章講話及文範」(一九一二)等

があり、文章の個々の論述に至つてはまだ多数の著をあげなければならないけれども、修辭學と心理學との關係を考へる場合には以上の四五種につきる樣である。さうしてこの四五種のうち、五十嵐氏のものをのぞき、他は多かれ少なかれ全て聯想主義の立場に立つて居る。このうち聯想心理學の色彩を最も明瞭にして居るものは夏目さんの著書であつて、文章の修飾を「全て聯想によつて説明し得べし」と言つて居る程である。島村氏のにも坪内氏のにも聯想心理學はいろいろな形で消化吸收されて居るのを見る事が出來る。

五十嵐氏のはこの點できはめて變つて居る。氏の修辭に關する基礎理論については後に詳しく敍述且つ批判するつもりであるけれども、これが聯想を中心とせず、感情的價値を中心とした説明原理を探つて居る事は特筆すべきであらう。

とも角我國に於ても修辭學と聯想心理學との結びつきは、きはめて密接であつた。さうして現代においてもこの結びつきは決して解消されては居ないのである。修辭學者及文體學者にして、單なる形式的事實の設定に滿足するものはとも角、さうでなくて、何等かの「説明」を志さうとするものは、必ず未だスペンサー・ベインを引用する。聯想心理學はこの領域においてはまだまだ深く根をはつて居る。

これはなぜであるか。この領域では聯想心理學がなぜかくも壓倒的な勢力をもつて居るのか。今この問題に深入りして居る餘裕はないが、これは聯想心理學が四五十年前の社會狀態を反映する極めて强力なイデオロギーの一つであつた。――さうしてかかるイデオロギーを生んだ社會狀態の幾分は未だ決して消失して居ない――といふ事の外に、言語自體の構造に關係して居る所が多いと思ふ。言語は我々の意識のうちに流れる不斷の變化を固定的なものに變更

してこれを表現するといふ方法でのみ自己を社會化するのである。ジェイムズが言ふ様に、我々の意識には流れの早い部分（うつり行きの部分）と流れの比較的おそい比較的「安定」な部分とがある。※言語はこの安定的な部分を採り出して、そこを接ぎ合せ、流れの早い部分を表現の素材から除いてしまう。かくて、言語は聯想心理學の考へ方に全く適合した思想表現の方法である事がわからう。聯想心理學が意識の事實を意識の安定的な部分（即ち心像）のみに變形してしまつた様に、言語も、思想を安定的な部分のみにしてしまひ、これを結合して思想の表現が可能になつたと考へる。從つて言語はもともと聯想心理學的なものなのであり、言はば聯想心理學そのものの發生の地盤なのである。

※ James, Wm, The principles of psichology, 1890. vol I. chaf. Ⅸ

然し言語がかかる聯想心理學的な形式（語の結合によつて思想を再現する、といふ）を有するとしても、それは言語が聯想心理學的方法によつてのこりなく説明される事を意味しない。言語の聯想的形式はまたそれ自身更により深い心理學的原理によつて説明されなければならない筈である。

のみならず、言語の聯想心理學的説明は言語の重要な種々の側面を見おとして居た。最も閑却されて居ながら、最も重要だつた方面は、その社會性である。聯想心理學はその發生の地盤からして著しく個人主義的であつた。全てを個人の内面の「經驗」から説明することが彼等の得意の持つて行き方であつた。修辭學においても技法の社會的効果を考へず、これをもつぱら個人的感覺によつて説明しようとした。さうしてこれによつて、種々の見落しと牽强附會をあへてしたのである（詳しい例については後を見よ）。この事は特にスペンサーにおいて甚しい。修辭學が聯想心理學のとりことなつたために修辭學の原理が奇妙なわきみちにそれて、修辭法の眞の効果を見落してしまつた事は著しい

ものがある。

従つて我々の課題は、修辭學を聯想心理學の桎梏から解放する事である。聯想心理學は要するに主知主義の立場であり、修辭技法が感情を中心として成立するものである以上、この二つの結びつきはどこかで無理を作るにきまつて居る。この二つの結びつきはもつと統一的な心理學原理の上でのみ始めて可能にならう。我々は文章論の課題を「文章の修辭技法の心理學的解明」として規定したが、この場合、心理學的解明とは、從來の解明(聯想心理的學解明)の批判と、新しい原理による解明の試みといふ二つの課題を含むのである。我々は次に進んでこの新しい心理學原理の展望を試みなければならない。

この際注意しなければならないのは、今のべた樣に、聯想心理學は現在でも尙、修辭學の中に根をはつて居るといふ事である。修辭を聯想心理學から解放して、これを新しい心理學原理の中に抱攝するといふ試みは、まだ何人も試みたものがないのであり、從つて筆者がこれを行ふとすればどうしてもドグマとならざるを得ない。聯想心理學の批判は時として見當はづれとなるであらうし、新原理の確立は考察の精密を缺く結果具體性を失ひ、形式に流れるであらうおそれは充分にある。かかる缺陷をおぎなふものはただ一つ、文章の實際についての實證的研究あるのみであるが、この紙數の中ではそれを充分に展開する事は想ひもよらない。從つてこれはより包括的な、且つ精密な研究への出發點としての意義を持ちうるにすぎない。この點で讀者の特に批判的な愼重な讀了を要望して置きたい。

二　文章論と心理學(上)——歷史

今述べた樣に、修辭學と聯想心理學との結びつきは、きはめて密接であつた。さうして修辭學を聯想概念から解放する事が私の一つの課題となつて居るのである。然し修辭現象を聯想概念から解放しようとする試みは、今までも部分的には試みられないわけではなかつた。で、最初にそれについてのべ、これを手引として私自身の批判に入つて行く事にしよう。

シャルル・バイイの立場はこの點において極めて特徴的である。彼は言語をそれ自身として抽象的に考へないで、生活場面の中において言語の意味を汲み取らうとする。言語はそれ自身で充足して居る、自律的な體系ではない。それがある場合においては自律性を得て居る場合があるとしても、それは大きな犠牲をはらつて獲得した結果である。多くの場合言語は、その言語の置かれる立場に規定される。それは立場から離れて、孤立させられると、それの有する大部分の意義を失つてしまふ。「彼は人を殺した」といふ言葉も、それ自身として語られた場合には唯一つの事實を示すにすぎないが、それが自己の親友に關して語られた場合には大きな驚嘆を呼びおこすであらうし、法廷で發せられた場合には、明確な斷定の資料となるであらう。從つて言語の研究に當つてはその言語の置かれる立場或は場面を考慮の中におく事が必須的であり、むしろ言語をある場面內の一つの部分として取りあつかふ事によつてのみ、言語の眞の理解は得られるに相違ない。*

* バイイ「生活表現の言語學」（小林英夫譯）第三篇「言語表現性の機構」――以下の叙述は全てこの篇の叙述に從ふ。

從つて、言語は、この點において身振やしぐさやその他の場面の徴表に近づいて行く。本來をいへば言語と例へば「睫毛のパチクリとの間に原理上の區別は微塵もない。立場的記號を勘定に入れるならば、この差異は愈〻小さなも

のになる。全體的表白に於て分節せる記號の相對的な量を考量するならば、區別はなかんずく程度の差である。この比が大になればなる程、謂ふところの言語に近付いて來る。之に反して記號はそれが自然的であり、自發的であり、指標の性質を喚び起せば起すほど、それだけ言語活動に所屬する。……」(邦譯二一八頁)かくて言語を全體場面の一徵表として考察する事が言語研究にとつていかに重要であるかが明かである。

この考へが現代心理學の主潮ときはめて相通じたものをもつて居る事は言ふまでもない。たとへばこれを日本におけるゲシタルト心理學者小野島右左雄博士の次の言葉と比較せよ。

「言語としての表現は、他の表現と同じ樣に、その場面の狀勢に左右せられ、この場の函數的事實として表はれるものであつて、この點は特に情意の表現において保存せられて居る。……或事柄を最初から告知する目的でなされる表現も、勿論、その個人の現に存在する全場面に規定せられるのであるが、この場合には他面、文法的習慣に從つて、表現しようとする思想が分節し、結局語の分節となつて表現せられるのである。…… 從つてこれを表現する人にとつては、かかる記號は表現しようとする思想の全場面に關係せしめてよく一定の位置を占め、それとの關係において有意味なのである。」(小野島右左雄「最近心理學概說」六六三頁)

聯想心理學が、モザイク的な考へ方であり、抽象から具體へ進み、部分から全體を構成しようとする考へである限り、言語を場面から理解しようとする考へ方とはおよそ反對なものであり、從つてバイイの考へ方はこの根本態度においてはたしかに聯想心理學的考へ方を克服して居たと言へよう。バイイが言語を全體の立場から考察しようとする態度は言語を生活から說かうとする根本態度の一つの現れなのであつて、この點で主意主義或は主情主義の傾向を有

すると考へられるから、この意味から言つても主知主義であつた聯想心理學の部分的克服と言ふ事が出來る。

然しバイイはかやうに根本的態度においてはすでに聯想心理學的考へ方を脫却して居たが、「言語表現の手續」を問題とする際には全然聯想心理學の考へにかへつて居る。

バイイによれば言語はかやうにその發生の始めにおいて、場面に規定されて居るが、それが發達するにつれて次第に自律性を獲得して來ると共に、恣意的な意味をもつ樣になる。それは意味を固定化して來て、あらゆる場合に適用される。といふ意味で社會化するが、他方そのために言語本來の有する表現性が失はれる。これは場面に密接にむすびついて居れば居る程表現的であり得るのに、場面から離れて自律性を增すに從つて、どうしても表現性を稀薄化せざるを得ない。

これを救うために、人は言葉の內顯的聯合によつて、場面を再生させ、それによつて言語を表現化する、といふ方法を考へ出した。恣意的になり切つて、言はば表現的には死んで居る「意味だけの」語を生かすには、まだ死なない言葉をそれにむすびつけて、それの誘發する聯合によつて語を表現的ならしめるよりほかはない。修辭學の種々の方式（文學上の修辭であれ、一般言語に含まれた修辭手法であれ）はかくして生れる。直喩は別として提喩、換喩、隱喩、擬人等の手續は全て內顯的聯合を應用したものである、と。

ここに至つて我々は聯想心理學的原理のあからさまな適用を見る。卽ちそこでは全ての比喩が聯合の方法で說明されたのである。從つてバイイは根本思想においてすでは聯想心理學を脫却して居たが、個々の具體的な場合においてはまだ聯想心理學の克服を完成して居なかつたと言ふ事が出來る。

聯想の原理によつて比喩の種々の手法を説明する事はスペンサーに始まり、ベインに至つて最も完全な形態に達した。これはきはめて巧妙な説明であつて、聯想の事實を究局のものと考へる限り、攻撃の仕様がないのである。聯想原理による比喩の説明には、

一　聯想された比喩がなぜ面白いのか。

二　一般に聯想が美的感情の説明原理になるか。

といふ二つの難點をもつて居る。然しかかる難點はひとが聯想をもつて究局の心的事實と考へて居る限り、不可能な問題を問題とするに過ぎない。この難點を説明するには聯想の概念をもう一歩堀りさげて、聯合法則がどうして起つて來るかといふ、聯想の根據を明にしなければならない。さうしてこの課題を解決したのが、ハインツ・ヴェルナー(Heinz Werner 1881—)である。

聯想心理學は類似、接近等の聯合法則をもつて詞姿の技法を説明しようとした。然しこの説明はなぜこの事象に對してこの聯想が効果的であるか、といふ事を説明する上には完全に無力であつた。これはある詞姿には二事象間の聯想が介在して居る、といふ事を指摘するに止まつた。この點にベインが淺薄であり、スペンサーがより進んで居ると言はれる根據がある。スペンサーはこの聯想の根據そのものを説明するために、やはり聯想主義的な一つの假説をもつて來た。これはエネルギーの經濟を中心とするものである。——然しこの種のエコノミズムに對する批判は後に譲り、ここには聯想の法則そのものについてだけのべよう。ベインの聯想の法則では、二つの事象間に聯想の設立される必然性が説明されない。ある事象に類似又は接近して居る事象は無數にある筈である。なぜそのうちの唯一つだけ

が効果的であるとして取りあげられるのであるか。

リボーの說明はこの點では多少進んで居る。彼は聯想の根底に「感情」をもつて來た。感情的基底を有するものが相互に聯想される。類似又は接近せる事象のうちで感情的基礎を等しくするものが結合されたとき、さうして感情的基底を有する二つの事象が事象自體としてかけはなれて居れば居る程、この詞姿は見事である。およそこんな說明がリボーの試みであつたと言へよう。彼は一切の感情的思考をかかる感情的聯想によつて說明し得ると考へた。

ヴエルナーの考へ方はこの考へ方を一層進展させたものと見てもよい。彼によれば、子供や原始人は我々の様に物を客觀的に見る事が出來ない。我々はたとへば「本」といふ言葉や表象を何の感情も加へずに考へる事が出來る。我々は本を本のまま、その形や、色や、厚さ等を考へる。然し子供や原始人にとつてはさうではない。子供にとつては本はいつも父がおみやげに買つて來てくれるきれいな繪のついた何かしら「うれしいもの」である。原始人にとつては本とはかずかずの呪文や禁句（タブー）の書いてある「畏敬すべき」物である。彼等にとつては本といふ客觀的なものはなく、現實の事物は多かれ少なかれ主觀的な色合を付加されて居る。

我々においてもかかる感じは少なからず見出される。クリスチヤンにとつては、たとへ彼がすぐれた學者であつても、「バイブル」の語は何等かの感情なしには表象されないであらう。日本人にとつては、「宮城」は唯客觀的な形を表象するだけではない。モダン・ボーイは、「銀座」といふ言葉をきつと何かうきうきした感じとともに思ひうかべるに相違ない。

かやうな現象は人の顏を表象するときに最もはつきり現れるものである、といふ所から、ヴエルナーはこれに「相

貌的知覺様式」といふ名前をつけた。我々は他人の顔を自己のこのみに從つて感情的に思ひうかべる。我々は顔そのものに、好みとにくしみとを對象化して感ずる。――この意味で子供や原始人の知覺は全て相貌的だと言へるのである。子供や原始人はいろいろの物を顔の様に見たり、人の様に見たりする。この意味で彼等はアニミスティックである。然しこのアニミスティックな見方の根底には自己の感情が客觀から抽象されて居らず、いつも對象と結びつき、對象と共に見える、といふ事實が存在するのである。

これは兒童及原始人の心性が、「未分化でごたごたして居り、かつ等質的である」等の一聯の性質を有する所から來る。彼等の心性は我々の様に、いくつかの層をなして分化して居らず、主觀と客觀とさへも分化して居ないのが常である。かかる全一的心性における知覺の特色が相貌的知覺なのである。

然しこの現象は、子供や原始人においてのみならず、我々文明人にもよわい程度においては全てに存在するのである。バイイが指摘した様に科學上の術語さへ、日常の使用においては必ず多かれ少なかれ相貌的意味を有して居る。(女學生が小さい先生をあだ名して「センチメートル」等といふのを想起せよ。)從つてかかる相貌的知覺は特別に純客觀的、科學的態度を採らない限り、全ての人が多かれ少なかれ持つて居るものと言はなければならない。

詞姿、特に隱喩(メタファー)はかかる相貌的思考様式に基いて行はれるのである。ある事象は、これが相貌的に觀ぜられるとき、その全體的、未分化的色調に從つて、種々の事象に「移調」(Transfonieren)される。これは聯想ではない。少くとも聯想主義者が思念した意味での聯想とは異る。それは一事象の有する全體の感じ、具體的な色調が、同じ全體的な感じ、具體的色調を有する他事象と結びついたのである。否結びついたといふのは適當でない。この結

びつきもやはり同じ未分化の精神の中でいはば直感的に未分化的に行はれるのである。一切の詞姿の基礎はかかる未分化的體驗にある。

ザロモーン島の土人の次の樣な歌謠はこの事を例證するに相違ない。

「おまへ（婦人）の身體は、やにいちぢくをかけまはり、枝をおりあるく、いやらしいコーモリ。」*

* Werner, H., Einführung in d. Entwicklungspsychol. S. 117.

ヴエルナーによればこれはかりに次の樣に解釋できる。「おまへは木の間をとびまはるコーモリの樣にいやらしい。おまへはきたないやにをたらすいちぢくの樣に氣持がわるい」。即ち文章の意味としてはやにいちぢくは婦人とコウモリとの兩方にかかつて居る樣である。然し實際の土人の感じとしてはさうではなく、この歌は單に婦人のいやらしさといふ全體場面をきはだたせるためにすぎない。婦人のいやらしさとやにいちぢくのやにと、バタバタとびまはるコーモリとはいづれも同一の相貌性をもつた全體場面なのであり、一つのいやらしさがコーモリにも、婦人にも、やにも見出されるのである。全場面をいろどるものは同じ一つの全體性質であつて、それはいづれもいやらしい、といふ唯一の性質によつてみたされて居るのである。

かかる歌詞は聯想によつても、又感情的基礎の想定によつても說明されない。これは第一聯想ではない。それは相貌的な全一體である。コーモリとやにと婦人とはいやらしさを通じて一つになつて居るのである。かかる歌詞は唯相貌視を想定する事によつてのみ始めて明瞭に說明する事が出來よう。

我々の日常語が多く相貌的である以上、我々の使用する詞姿もこれをかかる體驗の上から說明せねばならない。比

較する事象と比較される事象とは、聯想されるといふよりも、むしろ、共通の相貌的印象のために一つに融合してしまつて居るのであり、言はば一つのものの二つの部分或はアスペクトと化して居るのである。さうして比喩が相貌的體驗を利用して、二つの事象を一つの體驗の二つのアスペクトと化する事が巧妙であればある程、その比喩は眞味を帶び、効果的である。相貌的印象のない單なる聯想では決して比喩は生れない。聯想は要するに一全體の二部分（アスペクト）であるといふゲシタルト派の所説*がここにもその強力な支持を見出す譯である。

＊ ケーラー「ゲシタルト心理學」（佐久間譯）第八章聯合

文章論に現れた聯想心理學の批判と言ふべきものは、私の踄獵した範圍では上の二つにつきて居り、他は多かれ少なかれ聯想心理學の追隨にすぎない事は前にのべた通りである。又我國の文獻では五十嵐氏が聯想主義の分類を「表面的、皮相的であるとして排斥し、これらの修辭が、何故に、又如何に人を感ぜしめるか、何故に又如何に文の美を成すかといふ所までは踏みこんで居らぬ。これでは文章の修飾を眞實に、根本的に説明したものとは言はれまいと思ふ」といつて、新しい分類と解釋とを考案して居るのが唯一のものであると思ふ。この點で五十嵐氏の所論は劃期的のものであり、注目に價するが、ここに割愛する。

さて以上の批判の後をうけて次に私自身の所論を展開する事にしよう。

修辭學の中に直接聯想の原理を導入しようとする試みがいかに正しくないかは、以上の叙述からも大體推定されるであらう。聯想の法則といふのは本來記述概念であつて、説明の原理にはなり得ないものである。ある事象とある事象とが接近なり又は類似なりの性質によつて、聯想される、といふのだけの事ならば、それは心的事實の記載にすぎ

ないもので、何等說明ではない。――勿論この事實の記載そのものが旣に間違つて居るのであつて、ビネーの實驗やヴュルツブルク派の思考及意志の硏究は、主としてこの事實方面の誤謬を明にしたと考へてよからう。然したとへ聯想の事實そのものをかりに正しいと假定しても、これを說明原理にまで高めるには、そこに一層根本的な假定を必要とする。この假定は次の二つの方法によつて達成された樣である。

第一、聯想の事實を生理的神經的假說に對應させるもの。これは聯想の事實を神經の事實の結果――或はコレラートであると見るもので、ベインからモーズレーを通じて流れる生理學的傾向の學者に著しい。

第二、聯想の事實を「經驗」の類加によつて說明するもの。これは外界の事象を何遍も反覆經驗することによつて聯想が形成される、とする考へを中心とする。從つてこれは典型的なイギリス經驗論のタイプに屬すると言はれよう。この考へは結局外界の事物に關しては不可知論をみちびき、心理的な說明概念としては純經驗的な、從つて一切の先驗的要因を認めない學說に結唱する。ヒュームからミルへ通ずる不可知論と實證論の系統の聯想說の主張である。スペンサーもある程度までこの傾向を含んで居ると見られよう。

この二つの傾向はいづれもゲシタルト心理學によつて完全に克服された。生理的聯想概念はウェルトハイマーの生理假說により、經驗說はケーラー(「ゲシタルト心理學」)及レヴィン派のいくつかの硏究によつて、いづれも明かな反證があがつて居る。然し聯想心理學の批判について一般的敍述をなす事はこの項目の範圍を超越する。

從つて問題は聯想心理學を批判する事よりもむしろ、新しい心理學の立場をいかにして修辭學の中に導入して行くか、といふ事にかかつて居る。修辭學の中に含まれて居る舊心理學の殘滓を淸算してこれを新しい見地の下に包攝す

るにはいかにすべきか、これが今後の問題である。修辭學者は從來心理學的說明といへば聯想心理學を採るのを常としたが、然し彼等は自己の藝術的本能から——すぐれた修辭學者は多くすぐれた文章家であり、文學者であるのを常とした——聯想心理學では律しきれない獨創的な概念を所々に使用して居る。かかる自然發生的な心理概念はこれがナイーヴなものであるだけに、益々新心理學にとつて好都合な出發點をなすものであるが、問題はかかる概念をいかに處理するかにかかつて居る。

然しその前に聯想心理學と密接な關聯を有しつつ、しかも單なる聯想以上に出でて、一層基本的な說明を企圖した一つの試みについてのべておかねばならない。それはスペンサーの文體論である。

スペンサーの心理學はよく知られて居る通り、英國流の經驗論の集大成であると共に、當時壓倒的な勢威をもつて學界を支配して居たダーヰンの進化論の精神現象への適用であつた。英國流の經驗論が聯想說の有力な支柱の一つであつた事は今のべたが、スペンサーは精神の構造分析としての聯想說と精神を進化する一つの持續的な流れと見る進化論とを綜合する事によつて精神現象の眞の理解に達しようとした。進化論と聯想說とは一方が動的な見方であり、一方が靜的機械的見方である點で、明に矛盾して居ると考へられるが、スペンサーの偉大な頭腦はこの矛盾した二つの原理を破綻を見せずに結合する事に成功した。さうしてこの二つの概念を結合するくさびとなつたものが、功利主義の概念である。スペンサーの文章論はこの功利主義の概念の適用と見られる。彼はエネルギーの經濟(エコノミー)の原理を文章に適用し、この原理によつて修辭手法を批判する標準としようとする。彼によれば言語及文章は他人に思想をつたへる事を機能とするが、然しその思想傳達は相手の注意を消費させるものである。言語は記號であるから、それをきい

ただけでは意味はわからない。相手はその記號を心像に翻譯し、その意味を考へなければならない。全てこれらの操作は相當なエネルギーの出費を要する。從つて思想傳達の作業は相手の注意を支配する。といふ方向に行はれねばならない。修辭學書に記載されて居る規則や注意書を讀んで見ると、その大部分は讀者の注意を支配し、これによつてエネルギーの出費を出來るだけ少くする事が主眼となつて居る樣である。讀者の苦勞を少くする事が文章の主眼である。長い、ごたごたした文章はいけないといふのはこれによつて、讀者の注意がかくらんされエネルギーの消費が增大するからである。語の選擇から、語の配置或は文のきり方や、個々の詞姿に至るまで、文章論の一切はかかる注意經濟の原理に基いて成立して居るのである。

彼は更に進んで、イギリスの言語が、ドイツ語フランス語に比して何故にすぐれて居るか、といふ事から說き始めて（これは英語の單語が短い事、形容詞は原則として名詞の前へ來る事等々のためであり、これは全て精力經濟の原則に適合する）語の順序、配列、及詞姿等を全てこの原則によつて說明しようと試みて居る。

一例として詞姿の說明をあげよう。たとへば、「全ての人がポンプを」といふかはりに、「全ての手がポンプを」といつたものとする。これは提喩（Synecdoche）の手法であるが、これはなぜ前の文章よりもすぐれて居るか。言ふまでもなく、直接的だからである。全ての人がポンプを、といはれても、相手はその言葉からすぐに心像を思ひうかべるわけに行かない。人から手を、その手がポンプを採る所を思ひうかべて、始めて文章の意味を理解するのである。然るに後の文章であるとかかる二重の操作が省略されてしかもイメーヂが具體化し、注意が著しく經濟になる……。*

＊ Spencer, Le philosophie de Style. Traduction de Burdeau 英原本が手に入りにくかつたので、フランス譯によつた。

大體以上の様な說明方法がスペンサーの文體論の行き方である。この方法が單なる聯想による說明よりも一步を進めたものである事は明白であらう。彼は聯想をのべるだけで滿足せずそのものの效果を說明しようと試みる。この小著が多くの修辭學者によつて、文體論中の最高のクラシツクと呼ばれて居る理由もここにあらう。

然しスペンサーのこの考へは果して正しいであらうか。修辭の手法は全てエコノミーの原理で說明する事が可能だらうか。

言ふまでもなく我々の周圍にはエコノミーの原則にあてはまらぬ修辭技法がたくさんある。スペンサーの論述からさへ、それらの例外をさがし出す事は難事でない。スペンサーは文章は短かければ短い程その力と效果を增すと言つて居るが、我々の日常經驗の敎へる所によれば、文の短さには一定の限界がある。ある程度短い場合にはたしかに力と生氣をまし效果をつよめる事が出來るが、文が限度以下に短くなると、かへつて力を失つてしまう。又スペンサーは長い語(主としてラテン系統の語)は修辭技法としてはよくないと言つて居るのであるが、そのすぐ後で彼はいくつかの例外を認めざるを得なくなつて居る。長い言葉を使つた方が力づよく、エネルギツシユに聞える場合がある。これはエコノミーの原理に反するわけである。從つてスペンサーは長い言葉の效果を例外的な場合とし、これを運動感覺(長い言葉を發する際のエネルギー支出の大きい事)に歸すると共に、それによつて、注意の持續を長びかせる事が出來る(なぜなら言葉の最初のシラブルが言はれたときに相手はその意味の大體を推定し、豫期した言葉の出現をまちもうける様になるから)といふ理由を提起して居つて、さうして彼自身「長い言葉の效果はエコノミーの原理にあてはまらぬ」事を告白して居るのである。*

* Spencer, of. cit. p. 331.

かやうにエコノミズムによる修辭技法の說明はスペンサーによつてさへその貫徹が困難になり、例外を作らざるを得ないのであるが、一方、說明的原理にとつて、例外とは、この原理に對する致命傷を意味する事を忘れてはならない。記述的概念ならば例外を認める事は少しも差支ない。實際の事物が例外を有する以上、例外の出る事は不思議とするに足らない。然し問題が純現象的記述の世界を離れて、說明的法則(規則と法則の關係*)の領域に入つて來ると、ここでは與へられた事實の殘りない說明が要求されるのである。スペンサーの場合について言へば、彼のエコノミズムが例外を設けざるを得なかつた、といふ事は彼の學說が修辭技法の說明として根本的に誤つて居る事を示すものに外ならない。我々は修辭技法の凡ゆる場合を完全に說明し得る說明方法をさがさねばならない。

* Lewin, Gesetz u. Experiment in d. Psychologie, 1927.

近代における修辭學者(正統派の修辭學者)の最高峰の一人であるフランクリン・ジエナング (J. F.Genung) はこの困難を見透して、これをエコノミーの意味の擴張によつて救はうと考へた。彼はスペンサーの所說に對して、次の樣なノートを加へて贊意を表して居る。

「……ある主題は他の主題よりも一層はりきつた注意を要求するものであり、注意が作用するにも種々の程度と種々の樣式とがある譯である。……思想の中にはその本性上どうしても困難で複雜ならざるを得ないものがあり、その上、安價に得られたものはとかく低く評價されやすいもので、これは文學に限らず、何事についてもさうである。ある人の思想を理解するのに多大の努力を要する場合に、却つてその思想が價値深く考へられる場合も屢々ある。こう言つたからとて、決して語と文の單純

性を否定するのではない。……然し讀者の行ふ部分を出來るだけへらしてやるよりも、むしろ讀者により多くの事を要求し、刺戟する方が、眞のエコノミーである場合も多い。……生き生きした暗示的な言葉を使ひ、繪畫的な表現や、巧妙な句法や思想の段落を使ふのが、かかる意味のエコノミーであらう。この種のエコノミーは容易さを犠牲にして力を獲得するものとも言はれよう。………(又あらゆる事を全て明瞭に言ひきつてしまつては却つて讀者の想像が眞に、興味をそがれてしまふ事を語つて)讀者に何か自分でする事を殘しておいてやるのが眞のエコノミーである。思考の途上で暗示をあたへるに止めておき、何が言はれずにのこされて居るかを知らせる事もエコノミーである。かかる技巧はきはめてむずかしい。然しこの原則は心にとめておいてよい。」 J. F, Genung, The Working Principles of Rhetoric, 1902. p. 24—26.

ジエナングのこの考へはスペンサーに對してきはめて親切であるが、然しこれがスペンサーのエコノミー概念の不當な擴張である事は明かであらう。スペンサーはエネルギー支出を少くする事がエコノミーである事を主張したのである。然るにジエナングは、ある場合にはエネルギー支出を多くする事も一つのエコノミーであると主張する。エネルギー支出を多くしたのではスペンサーの意味ではいかにしてもエコノミーにならない事は、スペンサーの根本的立場——進化論、實證主義(思惟經濟の原理)及び功利主義——を考へて見れば明かであらう。スペンサーにとつては眞正面な意味でエネルギー支出の少ない事だけがエコノミーである。修辭學者ジエナングはエコノミーの概念を修飾的に使用する事に依て、これを内顯的に擴張したが、科學的な術語としてはエコノミー概念はかかる使用にたえない。

スペンサーのエコノミズムのもう一つの誤謬は、彼がエコノミーを修辭手法の最高の評價尺度とした事である。これは彼の立場が進化論的である事から言つて、當然であらう。彼によれば、エコノミーの原理に適合する文章のみが

美しく、而もそれはあらゆる國、あらゆる時代を通じて共通に美しい。人はエコノミーの原理一つをもつて文章樣式(Style)進化のあとをつける事が出來る。――この考へは明に文章樣式史(Stilgeschichte)の說く所と矛盾する。樣式史は文章樣式の標準が國により時代によつて異る事、ある時代に美しいとされた文章も、ある時代には決して美しいとはされなかつた事を明にした。現代において最もよいとされて居る短い、形容詞の少ない文章は、十五六世紀には子供らしい稚拙な文章として排斥されたに相違ない。エコノミーの標準だけでは樣式史の事實は說明されない。スペンサーの生物學的進化論はこの點で社會學的な言語觀と大きな衝突を來す事になる。

さて、それでは現在において我々の採用すべき心理學的說明の原理はいかなるものであるか。これについては項を改めて考へる事にしよう。

三　文章論と心理學(下)――理論

前項においてのべた所によつて、從來の心理學が修辭學又は文章論において決して正しい位置を得て居ない事が明かになつたと信ずる。修辭學が聯想心理學やエコノミズムに支配されて居る限り、それは決して正しい解釋に進み得ない。修辭學が心理學によつて正しい解釋に進みうるためには、我々は今までとはかなり異なつた道を進む必要がある。それはどんな道であるか。

卒直に私自身の考へをのべるならば、修辭心理學を正しく展開するためには、言語の社會的機能に關してはデュルケム派の社會學に影響された言語心理學及びアメリカのシカゴ學派に屬する社會心理學の言語理論を採り、言語の表

現機構に關してはゲシタルトの構想を具體的に展開して行くより外に道はない様に思ふ。然しここではデュルケム派の社會學や、シカゴ學派の社會心理學や、又はゲシタルトの考案についてくはしくのべて居る餘裕は到底ない。私は前者については本講座中田邊壽利氏の「言語社會學」、後者については佐久間鼎氏の「音聲心理學」、相良守次氏の「國語韻律論」等の熟讀をのぞみ、（田邊氏の論文は「日本における最初の言語社會學」の論述であり、佐久間氏のは、ゲシタルト原理を組織的に音聲に適用した劃期的の考案である）。更に、城戸幡太郎氏の「表現學序説」には、この兩者の考へが綜合的に批判されるであらう事を豫期して、ここには一切の歴史的背景を省いて、唯私自身の構想を全くドグマテイツクにのべる事に止めなければならない。

私のドクマの成否は、言語の社會的方面と言語の個人的方面（言語の全般的機能內でのこの兩面）を、いかに矛盾なく解決するかといふ事にかかつて居る。言語の社會的方面が社會學的傾向の人々によつて、言語の個人的方面が、最近ゲシタルト原理によつて開拓されつつあるとすれば、學說的には、この兩者の間にいかに巧妙な橋わたしを見つけるかといふ事が問題なのであるが、この問題を具體的に詳細に論ずる餘裕のない事は誠に遺憾である。

言語は從來思想感情の通達の體系であるとされて居た。きはめて多くの言語學書や、文法書や、修辭學書がこの命題を基本的なものとして出發した。然しこれは決して出發點ではなかつたと思ふ。それは言語研究の究局の到達點であるべきであるか、或は全然到達しなくてもよい平面なのであつて、言語の問題はもつとその前にある。

なぜなら、言語はたしかに思想感情を通達するが、然しそれはどうして可能なのか、思想感情の通達といふ事が言語の疑ひのない一つの事實であるにしても、その事が可能である根據はどこにあるのか、言語は個人の生理的な發聲

器官を通じて發せられる限り、本來個人的なものである。それがどうして社會的になりうるのか。この事が最初に明かになつて居なければ、言語の研究は一切進行しない筈である。從つて、從來の文法書や修辭學書が出發點として採つたものは、本來もつとずつと後にくるべきものなのである。

この事を明にするために、逆の場合をとつて見よう。現實の文法書や修辭學書は、言語は思想感情を通達する、といふ事實を出發點として採つた。これはたしかに事實であるが、然しこの事實は單に記述されて居るだけで、決して「說明」された事實ではない。それは現象的に定立されたに止まつて、その條件發生(說明の必須的要件)は少しも明にされて居ない。さて、出發點を、かかる記述されただけで、その條件發生が明になつて居ない事實にとるからして、それからあとの叙述が全てやはり記述に止まらざるを得なくなる。文法書や修辭書に現はれて居るのは、言語――思想感情を通達する言語――の手段であるが、この手段が何のために、又いかにして發生したかを知るには、言語の發生根據がわかつて居なければならないが、その發生根據をわからせずに出發するから、全ては記述に止まらざるを得ない。部分的には社會狀態の變化や、個人の心理狀態から、所々說明の出來て來る場合はあるが、全體は決して「說明的體系」とはなり得ない。

さて、單なる現象的記述、說明のない、條件發生を背景に持たない記述は、外見上の類似に從つて現象を一まとめにする外はないから、從つて、その結果は外見上は似て居ても、事實は全く相異る二つの事象を一つの分類の中に入れたり、外見上はちがいながら、本來は一つものの筈である二つの事象を二つの異つたカテゴリーにおさめる事となる。かくて分類が混亂して來る。分類が混亂して來ると、その上に立つ說明は非常に困難になる。なぜなら、本來二

つの原理のものが、一つのカテゴリーの中に入つて居る場合、說明はこれを一つの原理で統一的に見透さうと試みるのであるから、困難は當然であらう。實際の運用に當つては、文法學者や修辭學者の自然發生的な科學的精神が見はりをして居るから、完全な混亂を生ずる事は少ないかも知れないが、方法論の缺陷はいつかは重大な誤謬を犯す可能性を常に包藏して居ると考へねばならない。これらは全て、硏究の出發點を條件發生的に說明されない事實にとる所から生ずるのである。

さて、それでは言語的事實の條件發生とは何であるか。これを二つにわけて考へなければならない。

第一は言語が通信を可能にする社會的根據である。我々は言語によつて通信を可能にし、思想を交換する。自己の思想を他人につたへ、他人の思想を自己のものとする。從つて我々は言語によつて始めて他人との思想の同一化を企圖し得る樣に見える。然しこれは一面觀にすぎない。我々が言語によつて思想を交換し得るためには、その前に、社會成員の間に思想の一致がなくてはならない。さうしてかかる思想の一致を一部分つかさどる所のものが言語なのである。

デユルケム學派の社會學は、社會生活は個人に對して一定の拘束力を有する事、この拘束力は、個人から來るのではなくて、社會自體の有するものである事、この拘束力によつて我々個人は集合表象を得、思考、感情、行動の樣式を社會化するものである事を明にした。更にかかる拘束力を有する社會的制度として、宗敎的儀禮、繼承、風俗等があげられ、言語も又そのうちの有力なる一つである事を主張するのである。從つて彼等によれば言語は思想傳達の用具であるが、それと同時に思想統制の用具であり、かかる思想統制も、究局には社會の有する拘束によつて可能であ

る事が明にされたわけである。

この考へ方は言語の條件發生の一側面を明にすると同時に、又、從來言語と思考の間にうがたれて居たふかい溝渠を撤廢する事に成功した。社會が言語を統制するといふ事は、それを通して思考及感情を統制する事であり、言語と思考とは從來考へられて居た樣に決して別物ではない。ひとが外國語を習ふといふとき、人は決して外國語だけをならつて居るのでなく、それを通して、或はむしろそれと同時に、外國の考へ方と感じ方とをならつて居るのである。外國的な考へ方をならふ事なくしては決して外國語に習熟する事は出來ない。國語の特殊ないひまはしは、その國語の有する特殊な考へ方の現れなのであつて、この二つを切り離して考へる事は不可能である。よく文明國人が外國語の習練に下手であり、非文明國人が上手であるなどと言ふが、これは文明國人は、自己の文化が秀でて居るあたかもその事のために、他の國の考へ方を理解しないからに外ならない。

さて、かかる言語の條件發生の解明は修辭學の方にいかなる變化を及ぼすであらうか。社會學的言語理論のこの方面に對する第一の影響は、修辭が單なる言語上の問題でない事を理解せしめる點にある。言語は考へ方のうらうちなくしては決して正しく理解されない事を知れば、我々は決して言葉の修飾を單なる言葉のみの問題と考へなくなるであらう。言葉の修飾は考へ方の修飾を前提とする。ある言ひまはしを考へるとは、ある考へ方を考へる事である。ある比喩を見出すとは、從來見出されなかつた二つの事情の間に感情上の一致を見出すことであり、これによつて社會的な考へ方に一つの新しい見方を導入する事を意味する。修飾は單なる技巧ではない。それはしつかりした考へ方及感じ方の習練を前提とせねばならない。いくつもある言ひまはしのうちの一つを採る、といふのは、いくつもある考

へ方のうちの一つを採るといふ事を意味する。文章修飾の創造は新しい考へ方の創造である。

社會學的言語理論の修辭學に對する第二の貢獻は、修辭が社會化を要求し、社會的効果を必要とする事を知らしめた點にある。主觀的にはどんなすぐれた言ひまはしであると思つても、それが集合表象に合はないものならば文章としての役には立たない。修辭は効果を、社會的効果を外にしては考へられない。さうして自己の修飾手法を効果あらしめるためには、これを社會化せねばならない。自己の個人的體驗は、そのままでは社會化されるかどうかわからない。これを出來るだけ社會化し集合表象にアッピールする樣に變形したとき、始めて、それは効果を得る。かくて、修飾は個人的體驗を社會化するといふ手段を通じて、修飾者自身の個人的體驗を社會的體驗にするといふ事を含み、これによつて個人の心性を社會的ならしめる事に役立つ。

社會學的な考へ方の第三の貢獻は、集合表象が社會によつて必ずしも同一ではないこと、從つてこのことから修飾手法が時代によつて變化を受ける事を明にした點にある。社會によつてその「よいゲシタルト」と考へるものが違ひ、かくて修飾手法がちがつて來るのである。これについては文章史の方で論ぜられると思ふから、ここにはふれない。

社會學的言語理論はかやうに、言語がなぜ通達の用具となりうるか、といふ事實の條件發生の一面を明にする事によつて、修辭學の手法の解明に二三の基礎的な概念を提供するが、然しこれだけでは修辭手法の一つ一つの具體的な說明は不可能である。個々の修辭手法の意義及價値を明にするには、もつと個人＝社會的立場に立つて、その條件發生を考へなければならない。ゲシタルト理論が登場するのはこの場においてである。

言語が思想通達を可能とする社會的根據は以上にのべた樣に、社會の有する集合表象によるのであるが、個々の言

語が現實に通達の目的を達しうるためには、もつと、具體的な條件が必要であらう。それは何であるか。

これは一口に言へば、言語がある全體を代表する部分だからである。言語を考察する場合、ただ言語だけを考へても決して十分な理解に到達出來るものではない。言語は徴表（サイン）であるが、サインの役割をなすものは、言語の外にも種種のものをあげる事が出來る。かかるサインのうち、最も發達したものとして言語を考へるとき、これは始めて完全な解明を受けるに相違ない。

言語の始めは命令であると言はれて居る（ジャネー）。命令は始め、自分が對手にさせたいと思ふことを全部または始めの部分を自分でやつて見る事から發達した。類人猿が、仲間に何か命令をする――たとへば歩いて行けといふ様な事を命令するときには、自分があるき始めて見せるといふ。かやうに、サインは始めある場面全體、或はある場面のほとんど大部分であつた。かかることはきはめて不便であるから、段々と、サインの場面において占める領域が少くなつて、全體場面の唯ホンの一部分だけをもつて、その場面全體を代表させる様になつたのである。しかし、サインは、それがサインである限り、いつも全場面への志向をもつて居る。かやうにサインが、これによつて、全場面を志向するといふ所に、言語による思想傳達の可能性が存在するわけである。我々はサインによつて、全體場面を志向させられる。

「言語としての表現には一定の意味がある。……大海原と言つた場合、それによつて單に大海を想起するに止まらず、それを全場面としての具體的場面の一部として把握する所に意味がなければならぬ。かう考へて來ると、記號と記號によつて示されたものとの代表關係は、かかる記號によつて示されたものを全場面の一部として把握する關係の省略様式である……」小野島

「最近心理學概説」(一九三三) 六六三頁

かやうに、サインは全場面を志向するが、然し言語がその發生地たる全場面をはなれ、サインとしての獨自の發達をしてくるに從つて、それは場面の全體を直接且つ端的に志向せず、唯場面のうちの本質的な側面だけを志向して、他の部分をインプリシツト(内顯的)に志向するにすぎなくなる。これが所謂サインの有する意味である。始めサインは直接且つ端的に全體場面を志向するものであつたから、サインを言ふといふ事は、直ちに全體場面を思ひうかべる事を意味した。そこには全體場面の有する全ての感情、雰圍氣が共に存在した。サインは全てのこれらをもたらす事が出來た。然しサインが意味として發達すると共に、これは雰圍氣や、感情を不必要なものとして疎外し、サインが本質的と考へるものだけを取出す事を許す様になる。

我々がある場面におかれたとき、そこには緊張體系が成立する。我々がたとへば拳鬪をたゝかはうとする時、リンクは大きな緊張をもつて充たされる。これを緊張體系といふ。この緊張體系――我々の外に成立する雰圍氣――はそのまゝ我々自身の心の中の意識となる(内なるものは外なるが故に――ケーラー)からして、我々はそこに緊張を經驗するわけである。

我々は、たとへばかゝる緊張體系を一語で表明する様な言葉をもつて居ない。「拳鬪」といふ様な言葉だけでは、この緊張體系は決して言ひあらはせない。然し原始人には、同様な場面を、その緊張體系と共に表現する言葉があつたに相違ない。原始人はある言葉をきくと、その言葉そのものによつて、大きな興奮や悲哀をあらはす、といふ。これらの事から考へると、彼等においては言葉が未だ充分サイン化して居らず、言葉は直ちにその全體場面の緊張を再現

する事が出來るのであらう。

然し我々文明人においては、言葉が充分にサイン化してしまつたためにかゝることが不可能であるから、我々は外の方法をもつて、緊張體系を再現する外はない。さうして、この方法が卽ち修辭の技巧なのである。

我々はある事柄との關聯において緊張體系をもつて居る。この緊張體系は他の人を同樣な具體的場面に連れて來れば、或はその人にも成立する可能性があるかも知れないが、その事が不可能な場合には、我々は何とかして「言葉だけで」我々のもつて居る緊張をそのまゝ他の人に傳へなければならない。修辭の技法とは本來かうしたものである。これは自分の感じて居る緊張體系の場面を、何とかして相手につたへようとして案出されたものであり、この點に修辭法の發生根據があるのであつて、始めから自分の感じても居ない效果を唯聽者或は讀者に與へようとする修辭は、修辭としては邪道である。――この事は不可能ではないし、心理學はこれに對しても一定の法則を與へる事が出來るけれども、この事は私は取あつかはない。

今までの修辭學者はアリストテレースをのぞき、全ての人がこの點を明にしなかつた。彼等は思考と言語との間に根本的な對立を置き、同じ思想を唯言ひ方をかへる事によつて效果を加へる事が出來ると信じた。さうしてこの際、言ひ方をかへる事は同時に、思想の力點を全然かへてしまふ事になるのにきづかなかつた。よい言語と正しい言語といふ彼等の區別が不當である理由はこの點にある。

「あなたは文體が惡くていい材料を持つわけには行かない。」……假りにどんな事情にあるにしても、あなたは『成る程觀念は立派だが、文體は立派でない』とは言ひ得ない。著者があなたに觀念をつたへる唯一の方法は、言語の形式であつたのである。

立派な觀念があなたに達した。どうしてか。言語に於いて、言語によつてである。それ故立派さは言語の中になくてはならぬ。あなたは上手に出て言ふかも知れない。「言ひ顯はしは下手だが、意味は讀める。」と、然し何の光で讀めるのか。言語のなか、文體の中にある或もののおかげではないか。」Arnold Bennet, Literary Taste.（富田譯による）

さて、我々は言語が他人に理解される理由をたづねて、結局、修辭學の眞の定義に到達する事が出來た。修辭學は要するに言葉の完全な使用法を研究するものに外ならないが、かゝる研究（從つてかゝる實踐）が可能となる第一の根據は社會學的な側面――集合表象――にあり第二の根據は心理學的な方面――全體場面の緊張體系――にあつた。次に更に進んで、言語による緊張體系成立の法則を一層深くきはめて見よう。

四　藝術としての文章

以上の敍述は修辭の手法を緊張體系形成の手段として解明する根據を與へる事が出來たと信ずる。私の各論における全作業は修辭の手法をことごとく緊張體系形成の手段と見て、これへの意義を說く事にあるのであるから、この事は特に注意されたい。こゝではこの問題にからまつてくる一つの大きな疑問を解決して置く事にしよう。

それは言語による緊張體系再現の可能性の問題である。我々は必要の場合、我々が當面した全場面を言語的に敍述する事によつて、我々の緊張を他人につたへなければならず、さうしてこれが修辭學成立の根據なのであるが、しかし、この事は完全に行はれるか。我々は現實の緊張體系を「言語で」再現しうるか。我々は我々が行動として、或は事物として、或は現象として遭遇した事件を、言語でそのまゝ他人につたへる事が出來るか。

完全な意味でこの事が不可能なのは言ふまでもない。言語は形をもつて居らず、大いさをもつて居らず、にほひや觸感をもつて居ない。我々は單に時間的に生起する音聲だけをもつて他の全ての感覺的事象をのこりなく再現しなければならない。この事は勿論不可能である。然し緊張體系の忠實なる再現にはこの不可能が要求される。

この點で、言語は非常に大きな制限を持つて居るわけである。それはある場合には缺點と言つてもいゝ程大きな制限である。「君をあすこへつれて行けたらなあ」といふことは、我々が相手にどうしてものみこませる事が出來ない場合、常に口に出される言葉であらう。然しかゝる制限は、言語だけに限らず、一般に表現手段には何によらず、必ず附隨して來るものなのである。たとへば繪畫を考へて見よう。繪畫は言語にくらべて隨分表現が自由の様な氣がするが、然し決して完全に自由ではない。これは全場面を一定のワク內で代表的に表現せねばならぬ。それは三次元の空間を二次元の內で寫さねばならぬ。これは時間を寫すことが出來ない。ざつと考へてもこれだけの制限がある。その他、色の範圍、香や、觸の缺如等、決して全體場面がこのまゝ自由に寫せる表現手段ではない。映畫などになると、表現手段はかなり自由になつて來る。然しそれでもこれはおびたゞしい制限をもつて居る。たとへばアルンハイムは次の様な制限をかぞへて居る。

1立體の平面への投影　2空間的深さの減退　3色彩と照明の脫落　4畫面の限界と客體からの距離　5空間時間の連續性の脫落。

こゝにあげられて居る制限は、いづれも、視覺的な全體場面を同じ視覺的な映畫場面に移す場合の制限なのであるから、他の感覺を寫す時に、これがどの位困難なるかは想像にかたくない。全體場面は空間的にも時間的にも無限に

ひろがつて居り、制限といふものがない。これは一切の形式から自由である。所が、全體場面を表現する手段は、あたかも手段である、といふ事のために、その中から一つの手段だけが選擇されて來て居り、このために制限が與へられ、これが「形式」Form として設定される。表現手段は自己の表現しようとする全體場面(マテリアル)を、一定の形式の中で再現しなければならない。從つて形式はもと制限であつたと考へる事が出來る。然らば始め表現上の制限であつたものがなぜ、後には「形式」となつたか。始めは制限として、それがある許りに、もとの全體場面の緊張體系が表現出來ない、といつてなげかれたものが、今では、形式として、一つの特別な緊張體系を生みだす原因にまで進化し得たのは何故であるか。

藝術家に言はせれば、それは制限を、生かし切つた、とでも言ふべき所であらう。制限が形式となるとき、それはもはや缺點ではなくて、長所である。繪畫は區切り(ワク)があるために、特別の效果を生み、一種の緊張體系を成立させる事が出來る。これはにほひや觸をかいて居るために、これを色で現はし、にほひやはださはりを直接感じたのでは得られない。特別の緊張體系にさそひこんで與れる。藝術家は繪の制限を利用して、これを長所にまで高めた。映畫においても同樣である。映畫が從來短所と考へられて居た色の缺如をいかに生かす事に成功したかはよく知られて居る。[*] かやうに藝術家は制限を生かす事によつて、それをその藝術でなくては現せない長所に轉形したのである。

* ルードルフ・アルンハイム「藝術としての映畫」

然し心理學としてはこれだけではすまされない。心理學はかかる制限が何故長所に轉形したかを知らねばならぬ。なぜこれが特別の緊張體系を生む事に成功したかを知るとき、始めて心理學者は滿足する。卑見によれば、これは制

限がバリール（レヴインの用語の意味で）となるからである。我々は全體場面を出來るだけ忠實に再現したいといふ慾求を有つて居る。これが誘意性である。然るに、表現手段はこの誘意性の自由なる滿足を許さぬ。ここにバリールが生じて緊張體系が生れる。この緊張體系は、慾求の滿足が許されない限り、マイナスの狀態である。これをその制限の中で生かす事は、卽ち、これを補償行動として充足させた事を意味する。補償は實は完全に行はれたのでないから、そこに一種の緊張の殘滓が存在する、これが「形式感」の美感であると思ふ。藝術といふものはこれが形式的に完璧であればあるだけ、よく出來すぎたといふ意味で、一種實在（全體場面）から離れたといふ感じをもつものであるが、――たとへば實に見事にゑがかれたカーペツトのはだざわり（繪畫）を想起せよ、そこには何となく實在からの遊離が感ぜられる。――これは、全ての補償的滿足に伴ふ感じであると思ふ。形式の有する一種の緊張體系はバリールの性質から來るものと見るとき、最もよく解明せられるに相違ない。從つて全ての表現（藝術をも含めて）には全體場面の再現から來る緊張體系と、バリールとしての形式から來る緊張體系と、この二つの緊張體系の交錯であると見る事が出事る。藝術をかかる見地から見る事は、藝術心理學に新しい展望を與へるに相違ない。

言語的表現においても事態は決して異つて居ない。言語は一切の感覺を捨象して居るといふ點で、きはめて制限の多い表現材であると言へるが、然し言語はあたかもそのためにきはめて豐富な形式を生み出す事が出來た。それは文學形式論や、文體論や、修辭學の全體系がこれに捧げられても尙足らない位豐富な形式を有して居るのである。然しもとはと言へばこれらの形式は言語の制限から出發して居るのであつて、その制限を長所に轉形した結果がかかるものとなつたのである。從つて修辭手法の考察に當つては、全體場面をいかに再現して居るかといふ點と、その再現に

當つてつきあたる制限をいかに克服し、これを有利に轉回しようとして居るか、といふ、二つの點を見なければならない。前者は生の感情であり、後者は形式感情である。修辭學の心理學的研究とは、要するに、生の感情を特別の形式感情(言語)によつていかに表現して居るか、といふ點を見る事である。

これは一面から言へば、言語の特徴を研究する事に外ならない。なぜなら言語の表現上の長所とか短所とか言ふのは、價値批判を抜いて見れば、いづれも言語の表現手段としての特徴といふ事になるであらうから。そこで後篇においては、言語の特徴を通して、修辭手法の心理學的意義を考察する。と言ふ方法が取られるであらう。

以上を總論として、次に言語技巧の具體的考察に移る。

前篇　各　論

一　分類の試み

前篇でのべた様に言葉はそれが言葉として完成するに從つて、段々ともとの全體場面から種々の要素を捨象し、單なるサインとしての機能しか果さなくなつて行く。これを普通の用語に從つて、概念化と言つてもよい。言葉は概念化する事が大であればある程、場面全體の緊張體系をあらはす事が稀薄になる。そこでもとの全體場面の緊張體系をあらはす特別な手段として、修辭學の技巧が要求されるわけである。

ところで、修辭學の技法をいかに分類するかの問題であるが、今までの修辭學書に見られた分類は心理學的には決

して満足すべきものではない。普通の修辭學は修辭を消極的と積極的とに分けたり、語、句、文、段落等にわけたりして居るわけであるが、かかる分類は種々の點で非常な不便を生ずるのである。たとへば詞姿の多くは從來語の中へ入れられて居るが、よく知られて居る樣に、比喩は語として、「――の樣な」といふ風に使用される許りでなく、一文章を比喩のためにあてる事もあり、一句全體をあてる事もあり、又時としてはイソップの寓話などの樣に、文章全體が比喩になつて居る場合さへある。從つて從來の樣な外形からの分類は、修辭の實際の習練と言ふ方から言へば、さまで不便はなかつたかも知れないし、又不便があつても差支はなかつたらうが、學問的には全く困りものである。そこで、ここには全體の大別を今までとは全くちがつた原理によつて分ける事にした。大別以後の小さな分類は、叙述の便宜上、從來の形式的區分を採用する事もあるが、大きな分類は今までとは全くことなつたもので、前篇においてのべた、緊張體系の成立根據を中心とするものである。

言葉が概念であるかぎり、全體場面を表現し得ないことは今のべた通りであるが、言語はこの場合に、全體場面の緊張體系再現を二つの方向において成就しようとするもので、これが修辭技法の二大別となる。一つは原緊張體系を出來るだけ忠實に、そのままの形で再現しようとするものである。唯「顏」といつただけでは、我々には、その顏のもつ緊張體系は再現し得べくもない。そこで、この顏の有つ一切の場面を出來るだけくわしく、具體的に、精細にのべる事にするといふのがこの技法である。原緊張體系をそのまま概念(言語)の中へうき上らせる、といふのはたしかに一つの方向であらう。さうしてこれは普通人のもつ、最も普通の技術であり、欲求である、といへる。

例を寫眞にとつて見やう。寫眞は場面をそれ自體として、ある程度まで忠實にうき上らせた。然し普通人はこれで

は滿足しなかつた。彼はその緊張體系をもつとはつきりとうき上らせるために、寫眞に動く事を要求した。活動寫眞がかうして生れた。然しそれでもこれはまだ原緊張體系をうき上らせるには不充分である。――藝術家はこの不充分さを却つて利用するのであるが、普通人はこの方向を採らない。――そこで、彼等は活動寫眞に聲を附加した。トーキーの出現は原緊張體系の再現能力を著しく高めた。然し彼等は未だこれでは滿足しない。彼等は更に色を要求して居る。色が附加されたときには、彼等は更に香や、觸をも要求するに相違ない。かやうに原緊張體系を、原のまま出來るだけ忠實にうつし出すといふ事が一つの方向である。これに屬する修辭技法としてはまづ第一に品質形容詞がある。これがたとへば「顏」を「美しい顏」として形容するとき、原緊張體系がある程度まではつきりする事は事實であらう。次にもう少し進むと「描寫」がある。描寫は全體場面を言語的に出來るだけ忠實に活寫し、再現する事によつて、原緊張體系を浮び上らせる一つの手法である。又現寫法（現在法）などもこの手法の一つであらう。更にこの方向に於る最終段階としては叙述 Description に屬する一切の文章をあげる事が出來る。叙述に使用するテクニツクについては後にのべるが、これが原緊張體系をそのままに表現しようといふ方向の終局である事は明かであると思ふ。この方向が結局表現がくどくなつたり、讀者を退屈させたりする、といふ事はしばらくおいて、これが言語藝術の眞の方法であるかどうかは問題であらう。然しとも角一つの方向としてかかる手法が存在する事は認めなければならない。この方向は、それ自身として存在する事はきはめて少ない。言語藝術である限り、言語の特徴を少しも利用しない方向の手法がそれ自身として存在する事は考へられない。お爺さん、お婆さんの自慢話を我々がききたがらないのは、この方向が、もう一つの方向と伴はないからである。

第二の方向は原緊張體系をそのまゝとしてでなく、言語の形にホンヤクして表明しようとするものである、言語のつくり出す緊張體系を原緊張體系にかよらせて、これによつて所期の目的を達しようとするものである。例をあげて見れば一番よく解るに相違ない。文章家は、場面が切迫した場面であつたりきぜわしない場面であつたりすると、文章を程よく區切り、句の呼吸を早くする。又懷古的な、反省的な、ゆるやかな場面であると、句を長くとり、文章を長くする。前者の場合には措辭にも注意をして、短い、はつきりした、簡潔な語を使用する樣にするし、後者の場合には長い、大まかな、大語を使用する。これは何も場面そのものゝ緊張體系がさうであるといふのではない。場面の中の人が短い語を使用したとか、自分がその場に居合せて、そのやうな文章を言つたわけではない。急迫した緊張體系をどんなにくわしく叙述しても、これがまのびした文章で言はれて居ては決して緊張は生れないことを、作家が知つて居るからである。この手法は從つて、原緊張體系と同じ樣な緊張體系を、文章そのものの構造から作り出さうとするもので、この點で幻想にその根據をおいて居る。文章のつくり出す緊張體系は決して原緊張體系ではなく、兩者は全く無關係なのである。その無關係なものを關係ある如く幻想させて效果を生むのである。從つて、この手法は全く純粹に言語的語彩によるものと言へよう。

然し第一及第二の方向の中間に、第三の方向——といふよりもむしろ、二つの方向を綜合した樣な方向を區別しなければならない。それは比喩(或は詞姿)の有する效果である。隱喩、直喩、聲喩、提喩、等の一聯の詞姿は、これによつて原緊張體系を再現するのでなく、そのねらふ所は全く、原緊張體系と似た緊張體系を言語的につくり出す點にあり、この點で、第二の方向に近づいて居る樣に見えるが、又一方から考へると、それは出來るだけ原緊張體系に似

た緊張體系を、内容的に結びつける事によつて、特殊の効果をねらふのであり、この點では叙述の一種(第一の方向)とも言へるであらう。ある事を正面から叙述したのでは所期の効果を得られないとき、これを別の叙述によつて置きかへる事が比喩の目的である。この點から考へると、比喩の手法は第一の方向と第二の方向とを綜合したものであると考へなければならない。

比喩の手法は第一の方向と第二の方向とを結合したものである故に、これは文章藝術の粹であり中核であつて、文章藝術の有する一切の長所と短所を共有して居る樣にさへ見える。繪畫(表現派)や映畫(ロシア派)においても比喩の手法は使用されない事はないが、それは文章程に頻繁でなく、又その効果も文章程であるかどうか疑はしい。この點から見ても比喩は文章論できはめて重要な位置を獲得するものの樣である。

以上の三つの分類を基礎にして、次に修辭手法の個々の具體的吟味に入らう。順序としては第一・第二・第三の順序によるべきであるが、ここには順序を逆にして第三の比喩を一番先にのべる事にする。

二　比　喩

言語はその性質上、現象をそのままに、讀者の前に現出させる事が出來ない。それが表現し得るものは「關係」だけであつて、「現象」そのものではない。これが言語を使用する上に大きな缺點となつて、人々に種々のまどろつこしい感じを與へることは前にのべた。然し人は言語のこの缺陷を利用する事を覺えた。それが比喩に關する一聯の詞姿となる。

言語は現象をそのまま目前に現出させる事が出來ない代りに、どんな現象をでも、その關係だけをとり出して、目の前にならべる事が出來る。我々は丸ビルを目の前にもつて來るには、自分が東京驛まで出かけて行かねばならないが、言葉でならば何の雜作もない。丸ビル許りでなく、ロンドンでも、ニューヨークでも、又は月の世界でも、我々の前にならべ立てるには少しの苦勞もない。我々は唯言葉を言ひさへすればよいのである。言葉を言ひさへすれば、それが概念として我々の前におかれるのである。かやうに、言葉はどんな概念でも目の前にもつてくるのに少しの手間もいらない所から、緊張體系の成立しにくい現象は、これを緊張體系の成立しやすい現象におきかへて、それへの類似によつて、原緊張體系を髣髴させる、といふ手段をとることが出來る。かくて、言語では比喩とか象徵とか云ふ事が實に自由であり、又使用法によつては絶大な効果をあげる事が出來る。從つてこの修辭技法は文章道でも最も重要なものとされ、一切の技巧を排する文章論の立場でさへ、これは言語そのものの性質に內在する技巧なしの技巧であるとして、當然使用されてあやしまない。こゝにこの技法がいかに言語の性質そのものに喰ひ入つて居るよい技法であるかが明かであらう。この技法は、原緊張體系を、もう一つの緊張體系の類似によつて成立させようとするものであるから、そこで聯想による技法であると言はれる。このことはどうしても否定出來ない。比喩は聯想なくしては成立しない。從つてここには聯想心理學の最も根づよく這入り込む餘地があつた譯であり、現在修辭技法を全て聯想によつて說明しようと試みなくなつた人たちでさへ、比喩の中に聯想喩といふ、特別に聯想によつて說明する一領域をもうけて居る位である。さて、比喩を聯想によつて「說明」しようとする事から二つの重大な過誤が生れて來る。次にこれについてのべなければならない。——序に一言のべて置くが、ゲシタルト心理學は聯想の事實そのものを排除

しない。唯聯想を異なつた見方の下に見直さうとするにすぎない。たとへばケーラー（ゲシタルー心理學第八章）によれば、聯想とは從來は二つの異つた體系の中に別々になつて居たものが、一つの體系の中に包攝され、「一つになつた」事を意味するのであり、聯想ではなくて、新しい統一の形成なのである。然し彼は必ずしも聯想の語を排除する事を主張しては居ない。

第一の過誤は、比喩が聯想によつて、個人的に勝手きままに製作される、と考へられる事である。聯想は個人的な經驗によつて誰でもが異りうる。あるすぐれた人が從來結合する事を思ひもよらぬと考へられて居た二つの事物を結合する事に成功して、ここに見事な直喩が成立する。これを聯想心理學者は、作者の個人的な恣意に歸するに相違ない。かくて彼等は比喩を全く技巧的な手法と見なし、この事から推定して全修辭學を技巧的なものと考へるに至る。然し比喩は決して單に技巧的なものではない。單に修辭の名人が二つの事物をむすびつけただけではよい比喩は生れない。比喩を技巧的とのみ見る者は、この手法が言語の性質そのものに內在して居る事を見おとしてしまふ。この手法は本來的には言語の使用にかかつて居るのであつて、どんな原始人にも、自然發生的に言語の比喩は存在するのである（ヴェルナー、メタフアーの起原）。比喩は言ひうるならば言語の本質的機能の一つでさへあり、單なる藝術的なテクニツクではない。比喩を聯想によつて說明し、これを個人的・技巧的と見なす事はこの點を見おとす事になる。

修辭の技法を、思想と切りはなさないで考へようとすれば、比喩は、新しい考への發見と見なされなければならない。從來普通人には思つても見なかつた二つの事物が、ある角度から見ると全く同一の緊張體系を有する事が出來るのである。すぐれた比喩は全てかかる性質をもつて居る。二つの事物の有する緊張體系が、本來同一の姿態を有する

のでなければ、比喩は生れないと同時に（比喩の先驗的基礎）、又、これを比喩として現實化した作者はこの事によつて、我々に新しい物の見方を啓示した事になるのである。よい比喩はいつも新しい物の見方の創造である。「金錢を湯水の様に使ふ」といふ直喩を考へて見よう。これは金錢と湯水といふ二つの事物が從來結合されないものであつたのに、これを結合して、使ふといふ方面からは同一の姿態を存するものである事を明にしたものと見られる。この點に新しい「思想」の發見があり、比喩が單なる言葉だけの技巧でない事がわからう。この點から考へると、比喩は時代と共にかはつて行く事が推定されよう。時代は新しい緊張體系を成立させるから、それに應じた新しい比喩が必要になつて來る。聯想を個人的と見る說明はこの方面をも見落してしまう。ある二つの緊張體系が同一の世界のものとして統一されるかどうかといふ事はいつも事態（刺戟）そのものにかかつて居るのであり、この方面を無視して、個人的技巧的方面を强調する事は許されない。

第二の過誤は、聯想そのものによつて、比喩の藝術的價値が決定されると考へる事である。金錢を湯水の様に使ふといふ直喩は、金錢と湯水が聯想されたから面白いのかどうか、單に聯想されたから面白いのならば、世の中には聯想されながら面白くないものがたくさんあるのをどう說明するか。かくて、聯想主義は比喩の面白さの一側面を說明する事は出來てもその藝術的價値を全面的に理解するには全く無力である。

五十嵐氏はこの困難を救はうとして結體の原理及び朧化の原理といふ二つの原理を呈起する。結體の原理といふのは、無形の事物を凝固せしめて、具體化するのであり、朧化の原理はこの反對に、人の感じを惡くしさうな具體的な事物をぼかして、品よくする方向である。かやうに聯想が抽象を具體化するか、或は具體を抽象化するかに從つて、

その價値をことにする。この原理はヘーヴンが「比喩はその目的の高尙と卑賤とによりて、或は原意を高うし、或は原意を卑うするものならざる可らず」(島村、新美辭學より引用)といふのに少し似て居る。これは聯想の價値評價の標準を決定した點で一步を進めて居るが、然し、なぜ二つの方向が共に藝術的でありうるかについての說明が不足して居る。抽象を具體によつて比喩する方向が藝術的ならば、その反對はなぜ非藝術的でないのか。なぜこの二つの方向が共に藝術的として容認されるのか。從つてこの原理を心理學的に完全なものにするためには、說明をもう一步進めなければならない。私は緊張體系の理論からして、これを次の樣に變容しようと思ふ。

緊張體系は自己に近い Ichnähe なもの程强烈で、自己に遠いもの程稀薄である事が、カルステンの心的飽和の實驗やその他によつて實證されて居る。抽象的なものはその本性上自己に遠いからして、そこに成立する緊張體系はどうしても稀薄である。我々は抽象的なものの言ひ方ではピンと來ない。從つて、これの緊張體系をつよめるには、表現を自己に近いものにしなければならない。具體的なものが、この際よろこばれるのはこのためである。然し具體的なものならば何でもよいとは言へない。具體的なものでも、我に遠く、從つて緊張體系がつよく成立して來ないものはいくらもある。具體的なものの中から出來るだけ自己に近いものをえらんで、これによつて比喩を形成する事が結體の原理といふ事になる。從つておなじ具體的な事物のうちでも、視聽覺に屬するものは(客觀的だから)一般に自己に遠いが、嗅、觸覺のものは一般に自己に近いから、これらを使用する方がよく、原理的なものは、具體的な例によるがよく、總じて出來るだけ感覺的に物質的なものになぞらへる事がこの原理の方向であり、成功の原因である。

五十嵐氏のあげて居る例を見ればわかる樣に(この項目では頁數の關係上くはしい例をあげる事が出來ない。)、「志

をとげんとして勉強する」といふ抽象的な言ひ方よりは、「希望の光に導かる」といふ視覺的表現がよく、「約束をたがへる」といふのよりは、「食言」といふ味覺的な緊張體系の方がつよく、「人をみつめる」といふよりは「目が吸ひ着いた」といふ觸覺的緊張體系の方がつよい。かやうに自己に遠い、弱い緊張體系を、自己に近い、つよい緊張體系によつてうつす事が一つの技法である。然しどこまでも自己に近いものがよいか、といへば、それには限度がある、自己にあまりに近いものはその事によつて、緊張があまりつよすぎ、かへつて効果をそぐ。從つて內容それ自體がつよすぎる緊張をもつて居るものは、これを適當にやはらげて、自己に遠い、よはい緊張にもつて行く必要がある、これが五十嵐氏の所謂朧化の原理である。自己にちかすぎるもの、といへば、讀者をおこらす樣なもの、或はヘド、クソ、等の下等感覺の事物であらう。これらはいづれも文章を美しくする上には甚だしい障害となる。從つて、前者の樣なものはこれを抽象的一般的な形に直し、後者の樣なものはこれをもつと自己に遠い感覺上の事物に移轉させる。ヘドを小間物店、クソを黃金をちらすなど言ふのは、かかる技法の一つの場合であらう。

ここで注意しなければならないのは、いかなる程度の「自己遠近」がよいかといふ標準は一概には立てられない事である。これは場合によつて、文の內容及目的によつて異なり、又、時代によつて異なる。これはすべて文章樣式史の問題になるが、現代はかなりの程度まで自己に近い表現を許容する樣になり、ある場合には却つてこれを要求して居る。源氏物語などで見ると、あの當時はかなり極端な自己からの遠さが要求された樣に見える、又表現主義の藝術などは自己への近さを極端にまでおしすすめて居る。これらの標準は原理的に決定する譯に行かない。

次に各論に入つて、直喩、隱喩、提喩、換喩、聲喩、活喩、等等についてくはしくのべなければならないのである

が、紙數の都合上これらを全て省略しなければならない事を遺憾とする。ここには唯次の三點について簡單な注意を記すに止めよう。

一　**提喩と換喩**　五十嵐氏はこの二つの比喩を一括して擧隅法として居られる。この二つの比喩は一方では全體から部分のきは立つた所をあげながら、一方では、その部分のまはりをぼかす點で、奇妙な暗示の使用を試みたものと言つてよい。スペンサーが、この二つの比喩を、イメージを明きりさせるから、思惟經濟の原理に適つて居る、としたのは、事物の一面のみを見たもので、この全面は決してこれによつてはつくされない。たとへば「アハハハが連れてオホホホ禮に來る」といふ提喩において、アハハハ、及、オホホホによつて、新婚の男女の部分が髣髴たらしめられるとしても、アハハハ、及、オホホーの持つイメージだけでは、この川柳の効果は説明しつくされない様に思ふ。アハハハ、及オホホホ、の有する種々の姿態——男の盛裝、女の丸マゲ、及そのどことなく恥しげな態度等等——を想像する事なくしてはこの川柳は決して快き緊張をさそはない。從つてここには部分の具體化とともに、全體的姿態の暗示的摘出が存在する事が知られる。

さて、部分から全體を暗示する事が提喩及換喩の大きな役割であるとすれば、スペンサーのエコノミズムはこの點では充分でない事は明かであらう。暗示はかへつてエネルギーを支出させられるが故に快いのであつて、この意味で、直喩よりも隱喩の方が進んだ比喩だと言はれるのも、暗示的な効果、從つて、適度の緊張體系の成立によるエネルギー支出の増大があづかつて力があると思ふ。暗示による緊張體系の成立は文學理論の中で決して無視する事が出來ない要素であると思ふ。

二　活喩　Personification　これについて夏目漱石は次の様な告白をして居る。「以上の例において投出的解釋(活喩)を受けしものは皆具體的の物體に限られしが更にこれを推して抽象的事物に及ぼす時、果して如何程の効果を收め得べきかは多少の研究に値するところなるべし。元來余は所謂抽象的事物の擬人法に接する度ごとに、其多くの場合が態とらしく氣取りたるに頗る不快を感じ、延いては此語法を總じて厭ふべきものと判定するに至れり、……凡そ此種の擬人的投出法の價値は抽象的事物を具體化するにあるも、一方には折角具體的物體より抽出の方法を以て作り出されたる無形の質或は觀念を無理に再び元に捩ぢ戻す傾なきにあらず、されば此點において到底人工的の譏(ソシリ)を免れざるべし。……」(「文學論」第四篇第一章)この事はこの限り絕對に正しい。然しこれは決して擬人法全體に擴張して考へらるべきものではないと思ふ。漱石が「擬人法を總じて厭ふべきものと斷定するに至つた」のは、第一にこれを投出語法と見たからであり、第二にこれの人工的方面のみに目をつけたからであると考へられる。然しこの二つの前提は擬人法全體には決して適用されない事實である。

第一に、擬人法は投出の結果ではなくて、心理的には、自我が未發達(又は特殊の事情のため一時的に退化して)の結果、自我と非我との分界が不明確になり、この二つが同一の平面において考へられるに至るからである。この事はピアジエ及ヴェルナーが最近十年間において極めて明瞭に指示した所である。從つて擬人法が厭ふべきものと感ぜられるのは、本來自我と非我とがはつきり分界して居なければ成立して來ない筈の哲學的概念を擬人の技法をもつて着色したものに限ると思ふ。(漱石の論評した十八世紀の英文學はこの典型)。哲學的概念を擬人的技法をもつて飾るといふ事は、從つて本來全く自己撞着の技法である。これが人工的であり厭ふべきものであるのは言を俟

たない。

第二に、我々の日常の意識は必ずしも自我と非我との分界を明確にしては居ない。我々はいつも何程かその分界を不明確にして居る。從つて、我々は物を客觀的に見ず、むしろ一般に相貌的に見るのをつねとする。さて相貌的觀點は事物を我々と同格において見る。死物を生物のごとく、動物を人間のごとく見る。抽象物でさへもある場合には人格的に見られる事は珍しくない。この場合にはむしろ自然的態度が事物の擬人的言ひまはしを生むのであつて、最もナイーヴな修辭技法と言ふべきであり、或は修辭技法以前とさへ言ふべきであらう。これは日常の最も普通の感じであつて、人工的なものとはおよそ遠いのである。(たとへば「この戸はいつかな開きやがらぬ」といふ言ひまはしは何等人工的でない。) ただ我々成人においてはかかる相貌的語形は瞬間的のもので持續的でない。我々は常に客觀の見地に立ちもどる事を知つて居る。所が一旦ごく感激的な事件があはれて、自我と非我とが持續的に未分化の狀態になつた場合、我々は永續的な擬人法を何等の不自然なく使用する事が出來よう。意識的な組織的な擬人法はかかる特殊な場合に限らるべきであらう。然し斷片的な擬人的言ひまはしは、客觀の見地に立つを要しない文章においては思つたよりは著しく頻繁なものである。

三　聲　喩　Onomatopoeia　聲喩については問題が非常に多い。特に日本語程聲喩が自由自在である國語はなく、又日本の作家でも、聲喩を實に多く使用する、といはれて居る程であるのに、その研究が少しも進んで居ないのは甚だ遺憾と言ふべきであらう。なぜ日本語では聲喩表現が豐富であり、又豐富であり得るかが一つの問題である。次に問題になるのは聲喩的表現の可能性の根據であらう。聲喩は必ずしも音のあるものをそのまま言語的聲音にあ

らはすのではない。ホヤホヤ、のうのう、スタスタの様に、音のない姿態が充分聲喩的表現を受けるのである。この問題は最近ゲシタルト心理學者によつて、超モダール現象の解明と共に、この視覺的姿態の音聲描寫の可能性が明かにされた。これについては本講座中佐久間鼎氏「音聲心理學」に詳しい。

ただ、ここで新しく問題になるのは、かかる視覺的或は觸覺的姿態が、超モダール現象の根據の下に說明され、その自然的要因が明にされる樣になると、從來これを社會的約束の一種と考へて居た說明方法はいかなる變更を受けるか、といふ問題である。これは言語が社會學的理論構成によつてのみ完全な說明を受けると信じて居るものにとつてはきはめて重要な難問の一つであらう。

三　文の修辭構造

次に文章自體によつて作り出される緊張體系の記述に移る。これを便宜上語及文に區分するが、語についてはここに詳しくのべる事が出來ない。ただ次の二三の注意をするに止めよう。

一　スペンサーはアングロ・サクソン出の語と、ラテン系統の語とを比較して、エコノミズムの上からアングロ・サクソン系統の語が著しく優れて居ると主張し、ラテン系統の語をなるべく排する態度をすすめて居る。これをそのまま我國に移植すれば、和語を多く使用して漢語をなるべく使用しない樣にする、といふ事にならう。和語には一種やはらかいうちにも、毅然としたところがあつて、一種特有の緊張體系を成立せしめるが、我々の耳が漢語の語音になれて居るために、和語ばかりでどれだけの効果を收められるか疑問である。昔は和語によつても、漢語によると同

じ様な、明晰な、歯ぎれのよい、テキパキした感じを出すことが出來たものかも知れないが、現代の社會心性は和語によつてはその様な緊張體系を持つことが出來ない。ここに言葉の自然性と社會性との交渉の問題がある譯である。

二　新語、ほとんど凡ての修辭學書は新語を使用する事を禁じて居る。これは文の理解をわるくし、緊張體系の成立を困難ならしめる、といふ譯である。修辭學書が文章初學の入門書である場合、この注意はいたし方ない事であらうが、事實の問題として、優れた文章家で新語を使用しないものはない。すぐれた文章家は一方から言へばすぐれた思想家なのであり、すぐれた思想は新しい言葉によつてのみ表現され得る場合が少くないから、この事は當然であらう。我々はある作家の使用する新語を調査する事によつて、スティリスティックの重要な問題を解決し得ると思ふ。日本語においては、新語は特に英・獨・佛語及、その譯語として現れる。作品中の外國語を調査する事は文體論の重要な課題である。新文學運動の初期（當世書生氣質・浮雲）の作品にいかに外國語が多いかを想起せよ。又最近の文學に外國語が多く使用される事を想起せよ。最後に、アリストテレースがある程度まで新語の使用を積極的に支持して居る事を思ひおこすべきである。

「……措辭は新奇な語を用ふる事によつて高雅となり非凡な趣を備へ得る。……それ故詩人は新奇な語を適當に交へる事が必要である。一面においてこれらの新奇な語は措辭を平凡ならざるやう、賤しからぬやうにするが、他の一面において、その措辭の中の普通語は必要の程度の明快をもたらすであらう。」アリストテレース「詩學」二十二、（杉浦譯、六五頁）

このアリストテレースの文章は、新語がこれによつてフレッシュな緊張體系の成立に參劃すると解するとき、始めて明瞭に理解される。

次に文に移る。古來から文の三要素として「明快・力・優雅」の三つがあげられて居る。字句は修辭學によつて多少の相違はあるが意味する所はいづれも大同小異である。この三つの要素が、文による緊張體系の成立を目指して居る事は言ふまでもない。問題はいかにしてこれを達成するかにある。この點で修辭學はきはめて發達して居る。心理學が單に感情の質を分つだけでは充分でなく、その感情質がいかなる刺戟布置をととのへる事によつて得られるかを明にしなければならない事は前にのべたが、修辭學は、文を書く手段の研究の下に、この條件發生の大體を明にして置いてくれたのである。以下にこの三つの側面について簡單に見て行かう。

一　明晰　これは修辭心理學的に言へば、むしろ、力及優美の二緊張體系を成立せしめるための前提條件と見るべきものであらう。意味の把握が困難では、その方に對するエネルギー支出が多くなつて、効果が少なくなる。意味を出來るだけ、わかりやすく、直ちに把握出來る樣にして置かねばならぬ。そのために、文章を簡單な構造にする事、文中では唯一つの事を統一ある言ひ方で言ふ事(二つ或は三つの事を言ふてはならない)、なるべく短い文章にする事等が要求される。これらについて詳しくのべる暇がないから、最後の點について簡單にのべよう。

文章をなるべく短く、といふ事は近代言語の共通特徴であつて、日本語許りでなく、英語でも獨語でもこの事が要求されて居るといふ。* 特にカーペンターのごときは、初學者は三十語以上の文は書かぬ樣にするがよいとさへ言つて居る。** 三十語の文と言ふと、英語のリーダーの第三の中でも一寸複雜した文はこれ位になる。これ位が初學者の理想であると言ふのである。

* Deutschbein, Neuenglische Stilistik, 1932.

** Carpenter, Elements of Rhetoric, 1927, p. 104.

日本文では語が單位でなく、字が文構成の單位であるが、日本では百字位以上の文はよくない樣に思ふ。二百字詰の原稿用紙五行以内が適當である。日本の作家のうちでは菊池寛の文章は明晰の點では日本文としておそらく最高の域に達したものではないかと思ふが、彼の文章は百字以上にのぼるものはきはめて少ない。彼の文章の平均字數は四十字から四十五字であつて、百字以上の文章は全體のわずか三%にすぎない。明晰といふ點から言へばこれ位が日本文の理想ではあるまいか。谷崎潤一郎の文章にも百字以上の文章は一割とはない。一般に作家の文章は近代になる程短くなつて居るのが見られ、二葉亭の浮雲には三二二字及二〇八字など言ふ文章が見られるが（彼の平均字數は七十字程）、最近代の横光利一の文章などになると、菊池寛よりも又短くなつて居る。然し普通の人には菊池寛の文章が理想とすべき所であらう。

二 力　文章はある意味から言へば全て力を得る事を目的として居るとも言はれよう。緊張體系を成立させる最大の要因は力であり、文が力を得るために、古來から多くの人が苦心をしたのだとも言へる。力の點から見ると、次の諸點が問題になる。

A　文の長さ及句讀點。長い文は力がよはく、短い文は力がつよい。從つて、力のこもつた場面の描寫には短い文がよく、しづんだ、テムポののろい、瞑想的な場面は長い文がふさはしい。なぜなら、文から來る緊張體系が、内容から來る緊張體系と矛盾しないですむから。これについてはまだ技術的不備から、正確な統計が出來ないが、谷崎潤一郎の文章にしても、夏目漱石の文章にしても、主觀的な心理描寫の部分は之が長くなつて居る。これに反して大衆

文學でも、切り合ひなぞは、長い文では不可能である。

句讀點についても同様で、描寫される場面によつて種々の變化が見られる。然し一般的に言つて、文の長さ及句讀點は場面卽ち客觀的な側と共に、作家の主觀的な態度をも顧慮しなければならない。リードは句讀點は論理、呼吸、及リズムの三要素によつて決定されると主張して居る。* 論理といふのは、文章の表現しようとする意味であつて、客觀的に規定される。呼吸はこの作家の持つて居る呼吸であつて、句讀點は作家の休み方を示す。(從つてリードによれば文は思想の單位でなく、思想の單位はパラグラフである。なぜなら、ピリオドを打つても、作家はこれによつて必ずしも思想を完結させず、一寸長い休みをおいたに止まる場合が少くない。)第三の要素であるリズムについては次に項を更めてのべよう。

卽ちリードによれば、句讀點及文の長さは客觀と主觀との綜合によつて定められるといふのである。

* H. Read, English Prose Style, 1928. p. 50—

B　リズムが文の力をつよめるものである事は言ふまでもない。散文のリズムはきはめて困難な問題であるが、ここには前記リードの所說を紹介するに止めて置く。リードによれば散文においてリズムを決定するものは呼吸や心臟や步行等でなく、思想である。呼吸や心臟もリズムに關係はあるが、然しこの關係は間接的なものにすぎず、卽ち呼吸や心臟が思想を決定し、後者が更にリズムを決定するといふ風に見るべきである。從つてリズム　單位は思想の單位であるパラグラフであつて個々の文ではない。個々の文にもリズムがあるが、これはパラグラフの中に含まれて始めて意味を有する。コンラッドの様な外國人の英語は個々の文としてはよいリズムをもつて居るが、パラグラフ全體

として見ると、何となく妙な感じがするのは、パラグラフ全體にリズム單位をおく事が出來ないからであると。

この説は散文リズムの説明としてきはめて出色のものであると思ふが、ここにこれを特に紹介したのは次にのべる弛體と張體との區別に關係があるからである。

C　弛體と張體。西洋修辭學ではアリストテレース以來ピリオドによつて文を區別し、弛體（loose sentence）と張體（periodic sentence）とを分けて居る。張體と言ふのは文章が終るまでは意味が終らず、緊張體系が懸けられて居るものであつて、弛體と言ふのは、緊張體系の成立を顧慮せず、文のサスペンスが、文の途中でどんどん切れるものを言ふ。ジエナングの説明が最も明快であると思ふから、ここに紹介する。

「張體―これはサスペンション（緊張體系の同意語）の原理に從つて配列された文章に與へられた術語である。從つて張體とは文の主要な意味が文の終結まで延引され、環境や條件や、叙述詞などがこれに先行して、結論を準備する文を言ふ。この文の大きな利益は讀者の注意（緊張體系の一種）を保持し集中する點にある。」F. Genung, Working principles of rhetoric, p. 350

これを英文法の方から文法的に言へば文法的構造が文の最後まで終結しない文を言ふ、*と言へるであらう。然し弛體と張體との區別は、文法的な構造よりもむしろ意味と、その意味の生みだすリズムの起伏にある事が明であらう。――文法的には and, so 等で結合したものが弛體で、かかる結合なしに文が一單位として統一して居るのが張體であるとされて居る。

* Carpenter, Elements of rhetoric, p. 108.

心理學的に言へば、文の始めに起つた緊張體系を直ちに滿足させて、高揚させたまま保持しようとしないものがル

ーズな文體で、文に一種の誘意性をあたへ、この誘意性を文の最後まで滿足させないで、そこに緊張體系を成立させるものがピリオディクな文と言へよう。全然同じ字を使つても、

From start to finish, the seniors rowed a plucky race.

がピリオディクであり、

The seniors rowed a plucky race from start to finish.

がルーズであると言ふのは、前者が終りまでサスペンスを有するのに對して、後者が from までサスペンスを失つてしまうからである。*

* 文は A. S. Hill, The foundations of rhetoric, 1892 より取つた。これは今のべようとする佐々氏の修辭學の參考となつた本である。

さて、問題はこの區別をいかに日本文に適用するかと言ふ問題である、私の知つて居る限り、この區別を日本文に適用しようと試みられたものは、佐々政一博士だけであるが、氏は文法的區別に重點をおいて「終止詞が文の中間に現れる形をルーズな文と言ひ、文の終りまで終止詞の現れぬものをピリオディクな文と稱する」として居られる。この點から日本文を區別すると、

あらお新造さん、汚なうございますよ、そんな事をなすつちや。

或は恐る、不測の變あらんことを。

などいふものが弛體の典型的なものになるので佐々氏はこれを弛體のうちにかぞへて居られるのである。終止詞「ご

さいますよ」「恐る」が中途に來て居る點から言へば當然と解される。

然しジェナングからの引用によつてもわかる樣に、弛體か張體かはサスペンスのあるなしによつて區別されるべきもので、從つて文法的形態は第二でなければならない。最初に來るのは何といつても意味から來るサスペンスであるべきである。ことにリードの言ふ樣に散文のリズムを思想から來るとする考へが正しいとすれば形態の方はほとんど問題にしなくてもいい位のものである。今佐々氏があげて、日本語において弛體と見做さるべきものとして居るのを見ると、ジェナングの所謂「重要な意味」は全て文全體を見なければ、即ち文の最後まで讀み下して見なければわからない。前の文で重要なのは、「そんな事をして」はいけない、といふ事で、後者では「不側の憂」である。「或はおそる」とか「汚ない」とか言ふ事は言はれなくとも了解出來る。かやうに意味の方から見ると佐々氏があげて居られる弛體はかへつて張體なのであつて、「そんな事をなさつちや汚なうございますよ」とか、「或は不測の憂あらんことを恐る」といふ方が、むしろルーズな文であらう。これは平靜な氣分になつて文そのものの緊張體系を味はつて見れば誰にも合點が行くであらう。從つて西洋流の文法形態をそのままもつて來て日本文の弛體と張體の區別に適用する事はきはめて危險である。では、日本文で弛體と張體とを區別するにはどうするか。これはかなり困難な問題で、一朝一夕にはきめられないが、差しあたり、子供の使ふ樣な、さうしてとか、それでもつてとか、それだからとか、さう言つたので接續されて行く文章をルーズと見、その他の文章については一つ一つの場合を見て、もう少しこまかい規則を作つて行くより外なからう。子供の會話體は、子供の心性上からどうしてもルーズな文體になるが、ここいらを手がかりとして、更に調査を進めるべきではなからうか。とに角アリストテレース流の文法からの區別は日本語では反對の結

果になる事を注意したい。

D　省略及設問——暗示。文章では唯一つの事を言ふ必要がある。いろいろの事を言つては力は得られない。あれも言ひたい、これも言ひたい、といふ事のうちに唯一つ、どうしても言はなければならないことだけを言ふ。これが力を得る最高の手段である。さて、このために人は二つの手段をつかふ。一つは強調（Emphasis）で一つは省略である。一方は言ひたい事を強調する手段で、他は、ほかのすべてを全部省略してしまふのである。接續詞を省いたり、動詞や名詞をはぶいたりして、不用なものを一切のぞいて唯一つ言ひたい事を、きはだたせる。かういふ手段が採用される。然しこの外に言ひたい事をわざと省略する、といふ方法もある。一番いひたい事を言はずにおいて、それを讀者自身の發明にまつのである。これは讀者の側に自發的な緊張體系を成立させる事になるから、うまく行つた場合（即ち著者の言ひたいと思ふそのことを讀者が考へ付いてくれた場合）には大きな効果を生む事が出來る。設問法はかかる省略の一種である。それは自分の一番いひたい事をわざわざ言はずに、問ひの形にしておいて、これを讀者自身に答へさせる。それは暗示によつて却つて効果を強める事を企圖する。次にこれについのべよう。

設問が大きな力を生むものである事は知られて居たが、どんな形式の設問が力がつよくどんな形式が比較的印象性がよはいかは全く不明であつた。今までは全く經驗的に、各人の勘に從つて使用されて居たと言つてよい。所が一九〇〇年にビネーが暗示の實驗的研究に着手すると共に、この問題が新しい光の下にもち來され、その後、シュテルン（W. Stern）リツプマン（O Lipmann）及英のムツシオ（A. Muscio）等によつて研究が進行し、現在では設問形式の重なるものについて、その印象性が量的に明にされるに至つて居る。

まづ、質問の形式を暗示の強さによつて分類して見ると、次の様なものがあげられる。（シュテルン及リップマンによる）

一　定性的設問（Bestimmungsfragen）「机はどんな色ですか」の様に、疑問詞をもつた形式。この暗示効果は一番よはい。

二　完全な選言的設問（Vollständige Disjunktionsfragen）「子供はねて居ますかおきて居ますか」の様に、選言形式になつて居て、選言的概念のいづれか一つが眞なるもの。子供はおきて居るかねて居るかで、外の場合はないのであるから、被問者はこの選言的概念の一つを警戒すればよいわけで、從つて、問者の問が巧妙であつても、割合にそれをのがれる事がやさしい。

三　不完全な選言的設問「椅子の色は黄でしたか綠でしたか」の様に、やはり選言的になつて居るが、この兩概念が共に眞でない場合。椅子の色は本當は黄であつたとすれば、黄も綠も眞でない譯で、かう言ふ質問は被問者を著しく誤つた方向へみちびきやすい。

四　然の設問（Ja- Fragen）「部屋には椅子はありませんか」の様に否定の入つて居る形式である。否定が入つて居ても、意味は否定にならないで、肯定になり肯定の答へが要求される所が設問の特徴で、しかも、「部屋には椅子がありますか」といふ肯定的質問よりも、よほど意味がつよくなる。「……ならずや」とか「……ではなからうか」などと言ふ形式が設問による緊張効果の常套手段になつて居るのはこの事實にもとづく。

五　前提的設問（Vorwssetzungsfragen）これは豫め決定して置かねば言へない事を前提して、始めから肯定した

ものとして、その假定の次に更に質問を加へるもので、被問者はこの設問によつて、前提そのものを、變だと思ひながら、知らず知らず容認してしまふ結果になる。きはめてつよい暗示をもつた設問である。

文章論に關係のある設問形式としては以上の様なものであるが、その後ムツシオが全く別の原理にもとづいてしらべた設問形式と、筆者自身の實驗した質問形式効果を次にのべよう。

一　定冠詞と不定冠詞　「椅子がありましたか」の様にごく平凡な質問において、椅子を定冠詞づきにするのと、不定冠詞付きにするのとでは、定冠詞付きにする方が著しく意味がつよくなる。

二　否定と肯定　これはシュテルン等の分類の所でのべた様に、否定の方が意味がつよい。この際注意しなければならないのは、「椅子がありますか」といふのも「椅子がありませんか」といふのも、同様に、椅子の存在の方向に意味が行くので、椅子の不存在の方へは意味が行かない事である。もし椅子の不存在の方向へ意味を向けようと思つたならば椅子の存在の意味がよはくなる様な特別の副詞を付けなければならぬ。日本語では二重否定があるから、「椅子はなかつたぢやないかね」といふ様な特別につよい不存在の設問を容易につくる事が出來るが、外國語では不存在の設問には特別な技巧を必要とする。

三　「思ふか」と「思はないか」「椅子があると思ふか」「椅子があると思はないか」等は日本語に特有の設問形式で、「椅子があるか」ときくのよりもづつと意味がつよい。從つて暗示性は著しく大であるが、その代り反對暗示の可能性が多くなり、被問者が反對的に「思はない」「椅子がないと思ふ」などといふ、そつけない答をする事がある。設問の場合にはかかる形式は注意して使用する必要がある。カサにかかつて「……と思はないか」などとやると、その

質問があまりにおしつけがましいために、かへつて反感を呼ぶのである。※

※　拙稿「質問形式について」及「問の形と強さ」（「心理學研究」一九三九年）

三　優美

文の修辭形式の第三要素として修辭學書には、美とか優美とかが擧げてあるのを常とするが、近代國語では表現性を重要視する結果、積極的に「美しい」といふ事を目的にする修辭が好まれなくなつて居る事を注意したい。從つて「美しさ」はむしろ、「醜くない」事に重點がおかれ、積極的な美しさをねらふ事は、文の表現性を減ずるものとしてさけられないのである。ジ・ナングの如きは語音の耳ざはりにならぬ事、語の配列のおかしくない事、のやうな、消極的美を重要視して居る。これは文を美しいもの、としてよりもむしろ醜くないものとしようとする限り當然であらう。然し特に日本語について美に關して次の二點を注意せねばならぬ。

一　古文　日本文でも現代の口語文、候文のごときは表現性を重視するので、消極的美を見ればよいわけであるが、中古文や擬古文のごときは著しく積極的美の要素を重要視したあとが見られる。文を技巧的に、種々の技ぶりをとゝのへて美しく見せようとした事はこの種の古文の特色で、この點でロココ趣味に堕して居るとさへ言ふ事が出來る。ともかくも、これらの積極的な美の技巧としては次の様な手法を數へる事が出來る。

a　掛け詞——これが技巧的なロココ趣味にある事は言をまたない。

b　枕詞及序詞——これは太古文においては決して技巧的な文の裝飾要素でなく、實用價値をもつて居たものであるが、擬古文の様なものではやはり、繊細な技巧のための技巧の手段となつて居る。

c　地口、語呂、口合［三］　江戸時代の町人文學の様な、小手先の技巧から生れるものは、美としても決して

高級なものではないが、然しこれが美の一要素である事は認められよう。

d　對句(四六駢麗)對句は本來内容的な事實の對照から來るものであるが、これが文の美をつくり出すための手段として意識的に使用されると、單に形式的な對隅に墮するおそれがある。日本人の漢文などにこの種のいやみな作爲が見られる事はよく知られて居る。

二　文面(字づら)　字づらのことは西洋修辭學では說いて居ないし、日本の修辭學でもまだ說いた人がない樣に思ふが、日本文では特に重要な要素で、現代文中唯一の純優美的要素と言つてもよからう。字づらは漢字と假名との混合配當によつて、活字面に一種のやはらかみを與へることを言ふ。文章は實によくて、耳で聞くと心持よくても、活字を見ると、實にいやな感じを起させるものがある。二葉亭の文章などはこれに近い。——これは二葉亭が振り假名をよく使つた所からも來て居る。芥川龍之介の字面は美しいので有名であつた。字づらは假名と漢字の配合によるのであるから、西洋の樣にローマ字の文章では出る筈がないし、支那でも、漢字許りではこの樣な議論は起り得ないかも知れない。活字本の字面は明治大正文學の特色で、大きな研究題目を提供する。正確な鑑賞力のある人が調査に從へば、最も美しい字面の漢字と假名との割合を統計的に決定する事も不可能ではないと思ふ。

四　文の緊張體系

以上、文字によつて緊張體系をつくり上げる種々の手段について一通りの叙述を終つた。然しこの手段によつて、全體としていかなる緊張體系をつくり上げるかがのこされて居る。卽ち文全體による緊張體系の構成の問題である。

最後にこれについてのべなければならない。(文章手法の第一、即ち緊張體系の内容的表現の手法はこの項で一括してのべる事にしよう。)

文の種類を緊張體系の成立する方向によつて、二つの種類に分つ。それは敍述の文と説得の文である。

從來修辭學書には、多く敍事文、記事文、説明文、議論文、勸誘文の五つが置かれてあり、これらを又更にこまかく分つたものがあるが、敍事文、記事文、説明文はそれぞれ同系統に屬する文であり、議論文、勸誘文は又一つの系統に屬する文であるから、これを大別して二つとする事が可能なのである。

敍述の文は人に自分の見たもの、きいたもの、或は見たこと、きいたことを理解させ、彼をして自己の立場を認めさせる事が目的である。敍述の文で、自分の立場が相手にわかつてもらへない様であつたら、それは失敗である。それはあくまでも理解を目的にして居る。それは理解を目的にするが、然しその理解は決して、立場の同化をのぞまない。自分があるものを見、又はある事を感じた。その見たもの、感じたことが、相手に眞實であるとわかればよいので、それ以上、自分の感じた通りを相手にも感じてもらひたいとか、自分の見た通りに見てもらひたいとか言ふ事は敍述文の目的ではない。相手の立場と自分の立場とは始めからちがつて居てもよい。終りまでちがつて居てもかまはない。ただ自分の立場を一つの立場であるとして認めてもらひさへすれば、それでこの文の目的は終る。換言すれば、自分と本來ちがつた立場に立つ人に、自分の立場といふものがある事を認めさせるのが敍述文の目的である。

敍述の文は、始めは二人の立場がちがつて居る事を前提とする。ある人がライオンを殺したとする。それを話すのに、聞手は始めからライオンを殺したこともなし、第一ライオンが野放しであるいて居るのを見たことさへないかも

知れない。話手は相手がそんな人である事を始めから承知の上で話を始めるのである。自分の立場と相手の立場とが始めから全然同じであつたならば、敍述の必要はないので、立場が少しでもちがふからこそ話しをする必要が出來てくるのである。

これに反して說得の文は相手に自分の立場をわからせただけでは充分でない。むしろ相手に自分の立場をわからせる事などは二義的な、どうでもよい事で、主要なのは自分の立場に相手をひきづり込むことである。相手を自分と同じ立場に(現實に)立たせてしまふ事である。「君の氣持はよくわかる」といはれただけでは說得の文としては失敗である。それは、「なる程君の言ふ通りだ、僕は君に贊成する」といふ返事を得なければならない。そのためには、自分の立場を相手によくわからせる方がいいかも知れない。事物の道理をよく話して、相手に道理のある所をよく納得させるのも一つの方法であらう。しかし說得の目的はここにない。相手に理解させるだけならば敍述だけで澤山である。說得の文も敍述の方法を使ふけれども、それは終局において相手を自分の立場にひき込むためである事を知らねばならない。このためには相手に自分の立場をのみこます事は必ずしも必要でない。否、これが却つて不得策なことさへある。自分の眞の立場が相手に知られた場合には却つて說得に不都合を來す場合もあらう。この樣な場合には論點の變更を行つても說得を進める事が出來る。多くの說得は、立場をわからせる事なしに行はれる。宗教上の改宗を上手にやる人などは、何が何だかわからずに、知らず知らず熱心な敎徒にしてしまふなどと言ふ事をやる。從つて、說得のためには必ずしも敍述は必要でないのである。

一方、敍述の文といへども立場の同一化を企圖する事がある。自分が悲しかつたときには、その悲しさを相手にも

味はせる樣にして敍述を進めて行く場合がある。然しこれは終局において、自己の立場をわからせるのが目的であつて、立場を一つにした方がわからせるのに都合がよいからにすぎず、一つの方便にすぎない。敍述の文の目的はあくまでも理解にある。

以上によつて敍述の文と說得の文とが全然方向を異にするものである事がわかつたと信ずる。次にこの二つの各論に入らう。

一 敍述の文 敍述の文は記事文(Description)と敍述文(Narration)、或は更に說明文(Explanation)などに分けられるが、文章の實際ではこれらの區別は全然不可能であると言つてよい。ジヤネーは記事文は敍事文のプリミティヴな形で、敍事文は記事文の記憶作業が進歩發展したものであると言つて居る。*

* Janet, L'Evolution de la mémoire, 1928, p. 243

たとへば上の樣な圖形をとつて見よう。これを正確に文にする事は從來の分類によれば記事文の役割に屬するが、



然し文は時間的にのみ流れる時間的機能であるから、これをそのままの形でうつすことは不可能である。そこで、これを書く運動を言葉にして、これによつて文をつづり、これを視覺化させるより外に方向がない。幾何學において圖形を文に現すには「三角形ABCのBC上に一點Dをとり、ADを引く」といふ樣に、空間的圖形を運動になほして敍述するのである。從つて記事文も敍事文(運動或は時間的事件の描寫)の形をとらなければ完全に敍述の役割を果す事が出來ない。

さて、記事文及敍事文の兩者を通じて共通の特徴は、敍述の順序が大きな重要性をもつて居る事である。文の順序

がメチヤクチヤであつては、記事にしても決して正確な理解を得られない。このために作家は敍述すべき事柄を選び——事件の一切をかく事は不可能であるから——それを適當な順序に配列する。

空間的なものの敍述は右から左とか、左から右とか、端から端へ、時間的なものの敍述は始めから終りまで、時間的順序を追つて行くのが普通であるが、時には重要なものから始めて、それから段々とその廻り（左右及前後）に敍述を進めて行く場合もある。

敍述の順序は全く緊張體系成立の可能性によつて決定される。敍述は時間的に流れる行爲であるから、つまらなければきいてもらへないし、聞いてもらへても、究局の立場（自分の話したいと思ふ要點）がわかつてもらへない。そこで話に一定の「期待」の感をおこさせ、誘意性を置いて、緊張體系をつくり上げる必要がある。たとへば自分がライオンを殺した話をするのに、「僕はアフリカでライオンを殺した」と云つただけでは、相手に何の緊張もおこらない。そこで船出や砂漠への模樣から始めて、ライオンが突然目の前にあらはれた事、自分がそのときどんな風に思つたか、それからどうしたか、それから、それから——といふ樣に話すわけである。話の持つ誘意性は、全て話手が話の内容にサスペンスをおく事が上手か下手かといふ事にかかつて居るわけであるが、これには話の瞬間々々が面白い外に筋（終局がどうなるだらうといふ）の持つ誘意性が重要な役割を有する。敍述を中斷したり（中斷法）、二つの場面を交互に述べたり（飛移法）、現在目の前にある樣に記したり（現寫法）、するのは何れも期待によつて緊張體系を作り出さうとする技術である。

二　說得の文　說得の文は普通議論文と勸誘文とに分けられて居るが、議論をいかに合理的に行ふか、といふこと

は、論理學の課題であるから、この事についてはのべない。

相手を說服するには議論が正しい許りでは足りない。說得といふ事は本來感情を含む全人的な行爲であるから、知能を克服しただけでは說得はおこらない。そこで知能を含めて、全人格的に說得を行はうとする技術が必要になる。これを可能にするのが「感情論理」の存在である。

感情論理或は情的論理（Logique des Sentiments ou logique passionelle）は、事物の論理或は知的論理とは全然目的をことにする論理で、リボーによれば、說得に利用される情的論理の手法は、理由の集積と、漸層との二つであり、理由の集積は、自己の論點に好都合な理由を多數集めることであり、漸層は何人の立場からも認容される命題から始めて、次第に自己の論據の方へもり上げて行く手法である。然し特に文章について言ふときには以上の二つの外に尙次の二つの技法をあげる事が出來よう。

一　論點の變更　これはむしろ新しき論點の選擇と言ふべきかも知れない。情的論理は知的論理の採る事物の上の論點を採用せず、欲求を論點としてとる。從つてその議論は欲求から生れて强い緊張體系によつて進められ、事物に適合するかどうかは二の次とされる。欲求が强烈で、自己に近ければそれだけ議論は成功する。ファシストやドイツのナチスの論法が屢〻これである事は直ちに理解されよう。將棋などで、自分の方がまけさうになると、上手はよく强い手をさすものである。これはその手が强い、利害の强烈な手であるために、その方へ注意がひきつけられて、自分の論點（正しい指手）をおるすにしてしまふ。文章にもかかる事はよく行はれる。

アリストテレースは感情を刺戟して說得を行ふ事を修辭學の最高の任務であるとし、「怒」「恥」「競爭心」「羨み」

等十數個の感情を刺戟する方法をくわしく記して居るが、*彼の修辭學のこの部分は全篇を通じての壓卷であり、感情の條件發生の見地から見ても實にすぐれた觀察であつたのに、從來この見地を發展させるものがなかつたのは不思議でもあり遺憾な事であつた。とも角自分に最も近い感情を論點として採る事は情的論理のよい技法であらう。

* Aristoteles, Rhetorica. Book I. c2—c11.

二　問答　論爭は本來社會的なものであり、相手の存在を假定する。相手は自分とちがつた考へをもつて居るのであるから、これを說得するには、合理的な――或は少くとも外見上さう見える――理由をもつてこれを論破しなければならぬ。かうして自己の議論が社會性を得たとき始めて相手を說得する事が出來よう。そこでかかる社會性を示すために問答的な敍述樣式が採用される。この樣式によつて、讀者は反對說が見事に反駁されるのを見て、その所說の正しさを確信するに至るのである。この方法は又、これによつて自己の考へが自己中心になる事を警戒するために採用される事もある。

その他「例示」なども議論の手段として採用されるが、これは情的論理の手法としては、リボーの集積の手段に編入されよう。科學研究法としての例研究については言ふまでもなからう。

文章の種類に對する結論として、敍述の文と說得の文とは本來全く異つたものであり、その使用する技法も、敍述の文と說得の文とで全然その種類を異にする（たとへば漸層や問答は議論の技法で敍述の技法でない）事を强調したいと思ふ。この點は將來修辭技法の新しい分類を試みる上にかなり重要であらう。

昭和八年十二月二十五日印刷
昭和八年十二月三十日發行

國語科學講座（第六回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三
東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院